

グローバル化時代の今、文化多様性の価値を問う

人	類	学
研	究	所
通	信	第23号

2022

巻頭言	2
寄稿文	
Anthropos Institute International (Roger Schroeder)	3
ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭: インドの宗教と文化的多様性の危機 (アントニー・スサイラジ)	5
特集	
各国の人類学関係の学会組織・雑誌	
ペルーにおける考古学関係の団体、雑誌 (渡部森哉)	7
エチオピアにおける文化人類学界の動向 (石原美奈子)	8
タンザニアにおける人類学研究の状況 (高村美也子)	10
ドイツの人類学・民俗学 (リースラント・アンドレアス)	12
ネパールの人類学的研究の学術雑誌、学会活動 (竹内愛)	14
オーストラリアの人類学関係の学会組織・雑誌・成果・傾向 (ドーマン・ベンジャミン)	16
インドネシアにおける人類学研究 - 組織と学会誌 (廣田緑)	18
ベトナムにおける人類学研究組織 (宮沢千尋)	19
中国における人類学研究組織 - 本土と香港の場合 (張玉玲)	20
沼澤喜市資料整理プロジェクト報告 (加藤英明)	22
2022年度国際化推進事業の事業概要と今後の計画 (張雅)	25
活動報告	27
研究業績	40
刊行物	44
スタッフ	45



南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

巻頭言

渡部 森哉 (人類学研究所・所長)

人類学研究所通信の2022年度版(第23号)をお届けする。

2022年度は、新型コロナウイルスの影響も弱まり、大学における授業やフィールドでの調査が徐々に元通りとなった。人類学研究所の活動もコロナ前に戻すだけでなく、より一層発展させていきたい。

2022年度は9月から半年間ベンジャミン・ドーマン第一種研究所員が研究休暇を取得した。ドーマンさんが編集する雑誌 *Asian Ethnology* には十分に掲載原稿が集まっていたことから、人類学研究所の活動に大きな影響はなかった。

2022年度は公開シンポジウムを2回開催した。3月5日には西江清高先生の退職記念シンポジウムが開催された。3月11日には人類学研究所の元所長である後藤明先生の退職記念シンポジウムが開催された。対面、オンラインで多くの方が参加した。お二人とも2023年4月からは特任研究員として南山大学で研究を続けることになった。今後とも人類研の活動にご協力をお願いしたい。なお後藤先生は南山宗教文化研究所・人類学研究所の建物の3階に研究室を移された。

2022年度には新たな共同研究会が始まった。共同研究会「デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方—記録・身体・モノ—」のマネージメントは、石原先生の指導の下、プロジェクト研究員である加藤さん、菅沼さん、高村さんが担うことになった。若手研究員の活躍の場として人類学研究所が機能することを目標としたい。また宮脇第一種研究所員が責任者として共同研究会「装いの境界領域に関す

る人類学的研究」が始まった。テーマに関係する研究者が学内にあまりいないこともあり、学外から多くの研究者が参加している。研究所の共同研究会を通じて外部との繋がりを生み出す仕組みを構築することを目指したい。2019年度から2021年度までの共同研究会「大きな理論と現場の理論」の成果は研究論集12号として刊行された。是非ご覧いただきたい。

なお2022年度から、条件を満たしたプロジェクト研究員は南山大学の授業を非常勤講師として1コマ担当できることになった。研究所の活動と大学院教育、学部教育が有機的に結びついてきたことをうれしく思う。

2022年の12月に Anthropos Institute が編集しているニュースレター INTERLINK に人類学研究所の活動報告を寄せてほしいという要望があった。現在はシカゴに本部がある (<https://www.svdcuria.org/public/anthrop/newsbul/intlink/index.htm>)。Anthropos Institute は南山大学の設立母体である神言会が編集していることもあり、神言会の神父であるムンシ先生にも執筆依頼が直接届いた。ドーマンさんが原稿を用意し、ムンシ先生に確認していただき原稿を提出した。そしてAIIと南山大学との関係について今回、Roger Schroeder 先生に寄稿いただいた。感謝したい。

これに合わせて今号の特集として、各国における人類学、隣接分野の学会組織、雑誌について研究所スタッフを中心に報告していただいた。この特集は次号も継続する予定である。

Anthropos Institute International

Roger Schroeder (Anthropos Institute International)

Brief Historical Background

Anthropos Institute was founded in 1931 in St. Gabriel near Vienna in Austria. In accordance with the theological discourse of that time, the first statutes encouraged the members "to share in the discovery and description of the mysterious workings of God and the restless searching of the human spirit in the history of peoples and cultures." The founding members of the institute, in addition to Wilhelm Schmidt who became its first director, were Frs. Martin Gusinde, Wilhelm Koppers, and Paul Schebesta – acclaimed ethnographers and authorities in their respective fields of studies.

By the end of the 1950s, the General Council of the Society of the Divine Word (SVD) – the umbrella organization that supports the institute – decided to move it to Sankt Augustin near Bonn, in Germany, in order to bring it closer to the universities of Cologne and Bonn, which in turn created new opportunities for scientific cooperation. The new location of the institute also gave students of the missionary seminary of the Society of the Divine Word in Sankt Augustin access to the institute's library and specialists, and thus provided them with a better understanding

of human cultures. The facilities in which the institute is located today were completed in 1962.

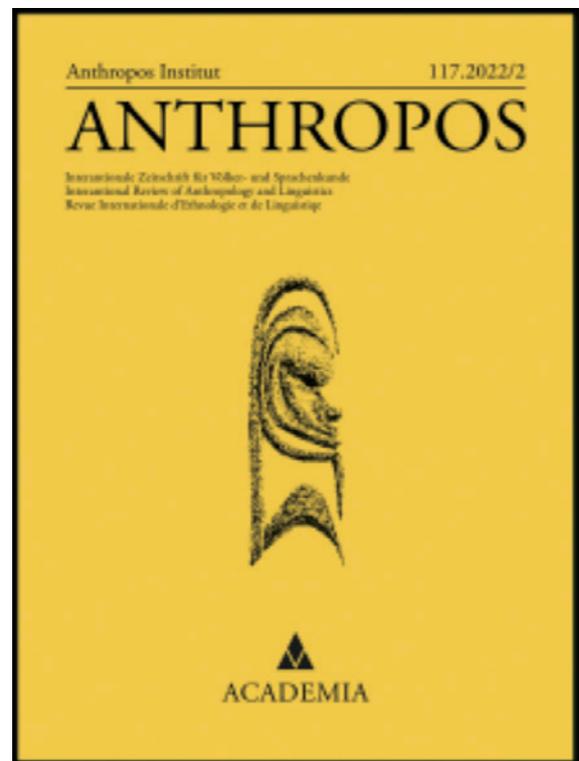
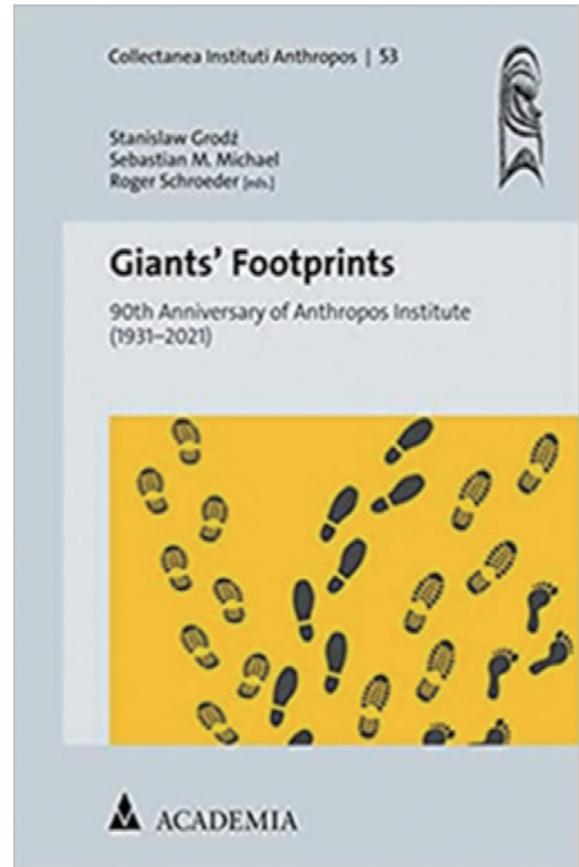
In 2003, the Anthropos Institute has been restructured into Anthropos Institute International, a worldwide network of scholars and affiliated institutes. A coordinator and two other members of the international council are appointed by the SVD General Council for a three-year term. The following were recently reappointed for another triennium: Dr. Roger Schroeder (USA), Dr. Stanislaus Grodź (Germany), and S.M. Michael (India). The Anthropos Institute in Sankt Augustin has been assigned the role of being responsible for the publications of the Institute (Anthropos journal and two book series) and housing the huge library and archives. For more information on these publications and other aspects of Anthropos Institute, see <https://www.anthropos.eu/anthropos/institute/index.php>.

There are currently thirty-eight full members, two emeriti, and four associate members, and ten affiliated institutes around the world, including Anthropological Institute, Nanzan

University. Recently, we expanded our membership to include two Hindu scholars who work with the SVD in NE India, as associate members (who are not members of the SVD or SSpS religious congregations). At the moment, the following are AII members in Japan: Drs. James Heisig, Robert Kisala, Peter Knecht, and Roger Munsu Vanzila. The annual INTERLINK, which was sent as a separate attachment, includes the annual reports from the majority of individual members and affiliated institutions.

Over the past years, we have strengthened our network of Anthropos Institute International by having an occasional ZOOM discussion or consultation on a particular topic/issue and publishing a book, *Giants' Footprints*, in 2021 (cf. cover) by a number of AII members on the occasion of the 90th anniversary of the Institute. The Anthropos journal itself is much older, in its 118th year of publication (cf. image).

Report prepared by Dr. Roger Schroeder,
Coordinator of Anthropos Institute
International
April 23, 2023



ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭： インドの宗教と文化的多様性の危機

アントニー・スサイラジ (人類学研究所・人文学部人類文化学科)

インドは様々な宗教、言語、文化、人種や民族などが共存する多様性の国である。人口の多くの割合を占めるのはヒンドゥー教徒であるが、インドは長年、民主主義国として継続してきた。何千年ものインドの歴史の中で、一部の統治者たちは異なる宗教共同体の共生を推進してきた。アショーカ王(C.304-232 BCE)も熱心な仏教徒であったにもかかわらず、その一人であった。アクバル大帝(1542-1605)は更にそれを推し進めて、インドの様々な宗教観を包括した混合主義を創始した。1947年、インド独立の幕開けに初代インド首相となったジャワハルラール・ネルーは、すべての国民には信仰の自由があり、どの宗教も平等に扱われる世俗国家であるべきだという閣議決定を行った。そして二つの条項が憲法に定められた。一つ目は憲法において、あらゆる個人と共同体が、いかなる宗教の信仰を持ち、実践し、布教すること、あるいは信仰を持たないことに対する自由が守られることである。二つ目は、どの宗教もインドの国教であると言明しないことである。このことから、インドは憲法においても世俗主義国家なのである。

しかし、インド独立以前から、ヒンドゥー・ナショナリズムの組織が数多く存在し、彼らは一貫して全く異なる視点を持っていた。これらの様々なヒンドゥー・ナショナリズムの組織は「サング・パリバル」と総称される。この組織には、RSS(「民族義勇団」または「民族奉仕団」、政党であるインド人民党(BJP)、宗教団体のヴァイシュヴァ・ヒンドゥー・パリシャッド(VHP:世界ヒンドゥー教協議会)、学生団体の全インド学生会議(ABVP)、世界ヒンドゥー教協議会の青年部を形成する武闘派のバジャラング・ダル(ハヌマン派)、RSSに政治的な結びつきのあるインド農業協会の労働組合が含まれている。サング・パリバルはインドが多宗教の国家ではなく、ヒンドゥー教多数派優位の国民国家であるべきだと考えていた。これらの団

体はインドのヒンドゥー・ナショナリズム運動の象徴と言える。

インドの世俗主義による政治的・領土的な考えとは対照的に、ヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーは1920年代にV.D.サーバルカルにより『Hindutva: Who Is a Hindu?』で初めて成文化された。この文献ではインドが文化的にヒンドゥー教国家と定義され、「Hindu Rashtra」(ヒンドゥー教の国家)への転換が意図されている(Savarkar 1969)。ヒンドゥー・ナショナリズムでは、ヒンドゥー教徒が人口のおよそ80%(Census Organization of India 2011)を占めていることから、インドをヒンドゥー教の国家と捉えている。また、自分達が真にその土地の子孫であるとみなす一方、イスラム教徒やキリスト教徒は血生臭い外国の侵略や非国民的影響を受けた産物であり、彼らに自分達の国民性を奪われると考えている。

全てのヒンドゥー・ナショナリズムの団体は政党であるインド人民党を支持している。インド人民党はヒンドウトヴァ(Hindutva:ヒンドゥー至上主義)の思想を掲げて1980年に結成された。インド人民党は1998年に中央政府で勢力を拡大し、1999年の選挙でリーダーシップを取りながら、他の政党と連携して国民民主同盟(NDA)を結成し、選挙で勝利した。しかし、国民民主同盟はヒンドゥー・ナショナリズムのアジェンダを共有していない他のメンバーで構成されていたため、インド人民党はヒンドウトヴァのイデオロギーを熱心に広めることはできなかった。しかし、インド人民党は2014年に初めてインド下院議会において過半数を獲得し、ヒンドウトヴァを強力に推し進めていくことになった。インドの現首相であるナレンドラ・モディ自身も年少期からRSSに所属し、ヒンドウトヴァのイデオロギーのために活動をしていた。

インド人民党が2014年に勢力を持って以来、イン

ド政府は、国、州、地方レベルにおいて宗教の改宗や異教徒間の結婚、牛の屠殺に関する法律など、イスラム教徒、キリスト教徒、シーク教徒、ダリッド（不可触民）、アディバーシ（先住民と指定部族）にとって受け入れがたい、不利益となるような政策を推し進め、実施してきた。連邦政府は批判の声、特に宗教的マイノリティの声、そしてマイノリティの人々を擁護し支持する者たちの声を抑圧し続けた。監視やハラスメント、所有する建物の破壊、自由な移動の禁止、「違反行為防止法(UAPA)」による拘束や「外国貢献規制法(FCRA)」による非政府組織(NGOs)に対する規制などを行った。またインドのアッサム州において導入された国民登録(NRC)の試験的な実施は、2019年の市民権(改正)法(CAA)により保護を欠くイスラム教徒にとって市民権喪失の恐怖を増幅させた。つまり、政府のこのような政策の実施により、宗教的マイノリティに対する不寛容や共同体の分断を激化させ、暴力や死、傷害、性的暴行、礼拝所などの物的破壊、独断的な拘留、ネットいじめを含むハラスメント、他宗教、指定カーストや部族たちに対する社会的な排除を行うことが可能となった(United States Commission on International Religious Freedom, Religious Freedom in India, 2022)。現在のインド人民党政権では様々な教育的政策やプログラムを通じて教育制度をヒンドゥー教中心にし、リベラルで左翼的な影響を排除し、反マイノリティの考え方を正当化するために、歴史を書き直そうとしている。インド人民党が政権を持つ州ではヒンドゥー教の思想に影響を受けた公立学校が約20,000校存在する。それらの学校ではRSSの教育部にあたるVidya BharatiやShishu Mandirによって作成された既定のシラバスが使用され、ヒンドゥー教文化こそがインド文化であると教育し、インドに多様性や独自性をもたらしたマイノリティの貢献を完全に否定する。あらゆるインド的なものはヒンドゥー教が起源とされ、マイノリティ達はインド国外の政治勢力に忠誠を誓う外国人であるとされる。インド人民党は「インド化、国民化、神聖化」という教育と宗教の名の下に、人々の意識を操作す

ることによって、人々を分極化し、分裂させようとしている(Nalini Taneja 2011)。これはインド人民党がヒンドゥー・ナショナリズムの名の下に、ヒンドゥー教徒を団結させ、歴史や伝統においてもヒンドゥー教のイデオロギーを実現させようとしていると言える。

その後更に、ヒンドゥー教の思想を掲げるインド人民党はヒンドゥー教徒を一つにまとめ、票田を伸ばし、2014年にインドの国政選挙や、その後の多くの州議会選挙で勝利し、政権を樹立した。それ以降、元々世俗主義であった他のいくつかの政党も選挙で勝つためにヒンドゥー教のイデオロギーを選挙公約のマニフェストや政策に掲げるようになった。数多くの政党や政治組織、個人からインド人民党の操作的な政策に反対する声が上がったが、政府高官やインド人民党に属する政治家からの圧力のため、沈黙せざる負えなくなっている。インドの世俗民主主義と社会・宗教・文化の多様性を守るために、全ての人々や組織、政党が一致団結しない限り、ヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーにより、インドの世俗的民主主義の原則が脅かされてしまうだろう。

参考文献

- Census Organization of India
2011 Population Census. <https://www.census2011.co.in/>. Accessed on 15 March 2023.
- Nalini Taneja
2021 BJP's Assault on Education and Educational Institutions. Liberation central organ of CPI (ML). Dipankar Bhattacharya (eds.). http://www.archive.cpiml.org/liberation/year_2021/september/saffronimp.htm. Accessed on 16 March 2023.
- USCIRF
2022 Annual Report 2022 United States Commission on International Religious Freedom, Religious Freedom in India. Recommended for Countries of Particular Concern (CPC) India, pp.20-21, <https://www.uscifr.gov/sites/default/files/2022-04/2022%20India.pdf>. Accessed on 15 March 2023.
- Vinayak Damodar Savarkar
1969 Hindutva: Who is a Hindu? Bombay: Veer Savarkar Prakashan.

各国の人類学関係の学会組織・雑誌

今回の通信の特集として、各フィールドにおける人類学関係の学会組織、雑誌について所員から報告していただくことにした。各地でどのように研究活動のネットワークが構築されるのかについて情報共有したい。この特集は次号も続く予定である。

ペルーにおける考古学関係の団体、雑誌

渡部 森哉(人類学研究所・人文学部人類文化学科)

日本と異なり、ペルーには考古学関係の学会は存在しない。ではどのように研究活動が機能しているのかというと、基本的には、考古学専攻のある大学、博物館が中心となって研究が進められている。雑誌も大学や博物館単位で出版される。ここではその代表的なものを紹介したい。

まず、文化省が2014年から始めた、Congreso Nacional de Arqueología（考古学国内会議）がある。毎年8月から10月の間にリマで開催される。前年に行われた調査の報告が行われ、その記録がweb上で公開される。

次に Congreso Nacional de Estudiantes de Arqueología（考古学国内学生会議）があり、2022年には第29回が開催された。これは学生が主体の会議であり、担当は大学間で持ち回りである。しかし基本的には出版することにはなっておらず、学生同士の情報交換、交流の場となっている。

文化省管轄の国立考古学人類学歴史学博物館が出版している雑誌には Arqueológicas（『考古学』、1957年創刊、2022年に31号）、Revista del Museo Nacional（『国立博物館雑誌』、1932年創刊、2016年に51巻）がある。大学の雑誌には、ペルーカトリック大学考古学研究室が中心となって刊行する Boletín de Arqueología PUCP（『カトリカ大学考古学紀要』、1997年創刊、2022年に31号）、国立サンマルコス大学が刊行する Arqueología

y Sociedad（『考古学と社会』、1970年創刊、2022年に37号）、ペルー北部のトゥルヒリョ大学の Revista Arqueológica SIAN（『SIAN 考古学雑誌』、1996年創刊、2014年に25号）、トゥルヒリョ大学附属博物館が出版している Revista del Museo de Arqueología, Antropología e Historia（『考古学人類学歴史学博物館雑誌』、1990年創刊、2019年に14号）、アヤクチャのワマンガ大学の Conchopata（『コンチョパタ』、2009年に2号、2011年に3号）がある。いくつかの雑誌は刊行休止状態である。

フランス・アンデス研究所が出版する Boletín de IFEA（『IFEA 紀要』、1972年創刊、2021年に50巻）には考古学の論文をはじめ、民俗学、地理学、生物学などの論文が掲載される。Boletín de Lima（『リマ紀要』、1979年創刊、2019年に195号）にも考古学関係の論文が掲載される。考古学者ロッヘル・ラビーネス（Roger Ravines）が編集に携わっていたためである。クスコの Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”（アンデス地域研究センター「バルトロメ・デ・ラス・カサス」）が刊行する Revista Andina（『アンデス雑誌』、1983年創刊、2022年に57号）には考古学、歴史学、文化人類学など、アンデス研究の論文が掲載される。

その他、刊行が途絶えた雑誌が多くある。例えば、Museo de la Nación（国民博物館）が刊行した雑誌 Pachacamac（『パチャカマク』、1992年創刊、1号のみ）、Instituto Andino de Estudios Arqueológicos（アンデス考古学研究所、通称 INDEA）の雑誌 Gaceta Arqueologica Andina（『アンデス考古学報』、1982年創刊、2002年に26号）、ロドルフォ・モンテベルデ（Rodolfo Monteverde）が編集していたオンライン雑誌 Revista Haucaypata（『ハウカイパタ雑誌』、2011年創刊、2019年に14号）、Inka Llacta（『インカリヤクタ』、2010年創刊、2012年に3号）などである。

次にコアルペ COARPE（Colegio Profesional de Arqueólogos del Perú）について説明する。これはペルー考古学会、という組織で、これに登録することで発掘調査の申請ができる。それと併行して、ペルー文化省の考古学者登録制度もあり、そのどちらが有効であるかは政治的状況によって異なる。2004年に外国人もコアルペに入会しなければ調査ができないという状況となったが、ここでの登録番号が発掘申請のために必要な年と、文化省の登録番号のみで良かった年の間で揺れ動いた（渡部2012）。

コアルペは学会という性格の組織ではなく、政治組織であるため、研究大会などは行わない。Arqueología Peruana del COARPE（『COARPE ペルー考古学』）という雑誌が創刊され、2019年に第1号と第2号が刊行されたが、その後発行が止まっている。

以上のように、ペルーの研究は個別の大学や博物館、あるいは個人経営のものが多く、雑誌はしばしば刊行停止、休止となる。ペルーには大企業が育たないことが示すように、ペルーでは大きな組織が作られることが少ない。だからこれまで学会が組織されることはなかった。また、博物館の館長なども政治的理由で頻繁に変わる。それにあわせ編集者も代わると、雑誌なども刊行が滞ることがしばしばある。現在比較的安定して刊行されているのは Boletín de IFEA などのペルーの外に本部がある団体、あるいは Boletín de Arqueología PUCP など私立大学が発行している雑誌である。

日本人もしばしば執筆依頼を受けてペルーの雑誌に投稿する。これまで Boletín de Arqueología PUCP に多くの論文が掲載されているが、これは初代編集長であるペーター・カウリケが日本人研究者と親しくしていたためである。

以上は雑誌についてであるが、それ以外に書籍が刊行される。これは博物館などで予算を出して出版する形が多い。例えばシンポジウムの成果として本を編集する際には、そのために大学などに予算申請をする。基本的に考古学では商業ベースで刊行される本は極めて少ない。本の出版はシリーズものよりも単発の企画が多い。

参考文献

渡部森哉

2012 「ペルーでの考古学調査—ソフトなパワーの一事例—」『地球時代の「ソフトパワー」—内発力と平和のための知恵』浅香幸枝（編）、pp. 193-208、行路社。

エチオピアにおける文化人類学界の動向

石原 美奈子（人類学研究所・人文学部人類文化学科）

アフリカ北東部に位置するエチオピアには、今のところ文化人類学会に相当する全国的組織は存在しない。本報告は、その理由について検討するものである。

そもそも社会／文化人類学が学問として成立し、大学教育に組み込まれるようになったのは19世紀末の欧米においてであり、欧米とりわけ植民地をアフリカに数多く保有していた英仏にとってアフリカは「観

察／研究する」対象であった。ただ、エチオピアの場合は、アフリカの大半の諸国と違って植民地支配されていた経験が短く、1936-41年の5年間、イタリアの支配を受けたに過ぎない。だがそのことから、エチオピアがヨーロッパの人々の「まなざし」を向けられてこなかったかというそうではない。むしろ、4世紀に遡るキリスト教が独自に発展したエチオピアは「プレスタージョンの国」として大航海時代にポルトガル人が来航するなど、その「まなざし」の歴史は長い。17世紀にイエズス会がエチオピアのキリスト教徒をカトリックに改宗させることに失敗し、国外追放処分を受けてからしばらくヨーロッパ人の足は遠のいていたが、19世紀に再びヨーロッパ人がやってくるようになる。多くが商業的利益や冒険的関心、キリスト教の布教など学術的とはいえない目的を契機としていたが、植民地支配の経験が短かったこととも関連して、その出身国は多岐に及んだ。イタリア人、フランス人、ドイツ人、イギリス人、オーストリア人、ロシア人が、エチオピア各地を旅した。その旅の記録は、偏見に満ちたものであったかもしれないが、文字文化を有さない諸民族の当時の状況を伝える重要な媒体となっている。

20世紀に入ると、欧米諸国の研究者による学術的な調査が行われるようになる。1920年代にイタリア人人類学者、1930年代にはドイツ人人類学者がエチオピアでの調査を行っている。社会人類学の泰斗、エヴァンズ＝プリチャードもエチオピア西部のオロモ社会の調査を開始しようとしていたところ1936年にイタリアによるエチオピア侵攻に阻まれて計画変更を余儀なくされたことはよく知られている。

だが、本格的なフィールドワークを行った質の高い民族誌が編まれるようになったのは、1960年代以降である。人類学者 Alula Pankhurst は、欧米諸国や日本では、それぞれの国の政治経済的利益や関心に沿った形でエチオピアに対する「まなざし」が形成され、それが契機となって人類学者がエチオピアでの調査を行うようになったとしている (Pankhurst 2006)。歴史学者が主として文字を持つキリスト教徒社会に関心を向けたのに対し

て、人類学者がとくに関心を向けたのが、エチオピア南部の(無文字の)諸民族であった。この時期にアメリカ人の Herbert S. Lewis (ジンマ・オロモ) や、William Shack (グラゲ)、イギリス人の David Turton (ムルシ)、日本人の福井勝義(ボデイ)、ドイツ人の Ivo Strecker (ハマル) などが、それぞれ南部の諸民族を対象とした長期の調査を開始し、その後の人類学調査の伝統の礎を築き上げた。つまり、エチオピアにおける社会／文化人類学的研究は、欧米を中心とする外部者が牽引してきた。

では、エチオピア国内での人類学者育成はどのように始まったのだろうか。

エチオピアは、北部高原地帯に展開していたセム系のキリスト教王国が19世紀末に南部一帯に暮らす諸民族(アジア・アフリカ語族クシ系およびオモ系、ナイロ・サハラ語族)を征服することによって、キリスト教徒の皇帝を頂点とする多民族多宗教構成の封建的な帝国が形成された。政治的主導権を握ったショワ地方(今日のエチオピアの中央部)の皇帝メネリク2世(在位1889-1913年)が都としたアジスアベバは今日の首都となった。

アジスアベバに近代教育を導入したのもメネリク2世であった。そして1941年にイタリア支配からエチオピアが解放された後、亡命先のイギリスから帰国した皇帝ハイレセラシエ1世が力を注いだのも教育分野の発展であった。1950年頃に設立されたアジスアベバ短大は当初外国人教師が大半を占め、エチオピア人学生も社会の上層階級に属する選ばれた者たちに限られた。社会学的な調査や研究手法が教授されるようになるのは1959年以降であるが、1952年には民族学会(Ethnological Society)が設立され、定期刊行物 Ethnological Society Bulletin (『民族学報』)が1953～61年まで計11号出版された(Pankhurst 2006: 61)。1961年には短大が再編されてハイレセラシエ1世大学が設立され、1962～3年には社会学部が設けられ、1967年には社会学部が人類学・社会学部と改名された。だが、1960年代は、学生運動が盛んになったため、調査研究は滞った(Pankhurst 2006: 64)。

その後、大学の附属機関として、1963年にエチオピア研究所(Institute of Ethiopian Studies、以下 IES) が設立され、定期刊行物 Journal of Ethiopian Studies (以下 JES) も同年創刊された(現在継続中)。IES は海外の研究者の受け入れ窓口となり、JES は、IES に客員研究員として登録された外国人研究者やエチオピア人研究者による、言語学、歴史学、人類学など様々な領域にわたる論文が掲載された。パンクハーストの調査によると、2000年までの37年間の JES 掲載論文の7割がエチオピア人によるものであるが、人類学の論文(全体の1割)の著者のうちエチオピア人は2人に過ぎないという(Pankhurst 2006: 63)。

エチオピア人の人類学者の存在が顕著になってくるのは、1991年政変以降である。

1974年に帝政を倒して設立された軍部が主導する政権(以下、デルグ政権)のもとで、ハイレセラシエ1世大学はアジスアベバ大学に名称変更された。だが政権発足当初は、外国人教員が帰還し、学生も革命運動を広める目的で地方に送り込まれたため大学教育は中断された。1977年に大学教育が再開されると、全国から優秀な学生が集まるようになる。外国人研究者の足は遠のいたが、エチオピア人学生

による短期の調査をもとに書かれた学士・修士論文が量産された。1990年にアジスアベバ大学大学院に社会人類学コースが開設され、Alula Pankhurst はじめ外国人人類学者と欧米で学位を取得した少数のエチオピア人の指導のもとに専門的な人類学教育が発足した。彼らが、1991年政変後に導入された民族連邦制のもとで各州に設立された地方大学において人類学教育を担うようになる。

エチオピアにおける様々な分野にわたる研究を発表する場として設けられているのが、3年ごとに開催される国際エチオピア学会である。これは1959年から2022年まで21回にわたって開催されたが、そこで口頭発表するエチオピア人研究者は増加しているものの、人類学部門での発表者は相変わらず外国人が中心である。

このように、エチオピア人人類学者は育成されてきているものの、全国レベルで人類学者を組織した学会が組織されるには至っていない。

参考文献

Pankhurst, Alula
2006 Research and Teaching in Ethiopian Anthropology. In African Anthropologies, History, Critique, and Practice. Mwenda Ntarangwi et al. (eds.), pp. 51-75. London & New York: Zed Books.

タンザニアにおける人類学研究の状況

高村 美也子(人類学研究所)

はじめに

タンザニア連合共和国(以下、タンザニア)における人類学研究は、社会科学(Social Science)の社会学の枠組みに属している。これまで社会学では、人類学、社会政策、文化、宗教、開発など幅広い分野で研究が行われており、中でも歴史学、考古学、部族研究、言語学(部族語、スワヒリ語)が盛んに行われてきたといえるだろう。これらの研究は、タンザニアとスワヒリ文化の成り立ちが関係している。①

およそ2000年間にわたるアラブ・ペルシア商人がインド洋交易により東アフリカ沿岸部に滞在し、現地のバンツー人とアラブ・ペルシヤの人との交流でスワヒリ文化が誕生した点、②ドイツの植民地、イギリスの委託統治領であった点、③独立後、社会主義を採用し、120以上存在する部族と部族語を統一するため、東アフリカのリングフランカであったスワヒリ語を国語として採用した点、④土着信仰にイスラーム、キリスト教の浸透、⑤タンザニアを含めた東アフリカに

は大地溝帯が存在し、人類発祥の地としても名が知られている点など、主に5点が挙げられる。これらの人類学的研究は、オックスフォード大学(イギリス)、ロンドン大学(イギリス)、ダーラム大学(イギリス)、プリストル大学(イギリス)、オハイオ大学(アメリカ)、イエール大学(アメリカ)などの元宗主国を含めた欧米各国の研究所、および東アフリカのナイロビ大学(ケニア)、ダルエスサラーム大学(タンザニア)、ザンジバル島のスワヒリ語研究所(タンザニア)、カンパラ大学(ウガンダ)が主に実施している。

考古研究

Historia Kuu ya Afrika, Juzuu lililofupishwa (『アフリカの歴史要約版』、1999～2000、UNESCO)が代表的であり、1巻から7巻のシリーズで1999年から2000年の間に出版されている。先述した通り、東アフリカには大地溝帯があり、アフリカで生まれた初期の人類であるアウストラロピテクスの足跡化石が発見された場所もある。当文献では、アフリカ大陸の初期から植民地時代の1935年までと独立後の社会に分けて記載されており、アフリカ大陸全体の歴史的、考古学的研究の記録である。同大陸内で発見された石器、土器、壁画、人骨、人種、人類の移動、ヨーロッパ人による植民地のアフリカ大陸の歴史が、西アフリカ出身の研究者によって執筆されているが、タンザニアのダルエスサラーム大学とユネスコとの協力の下、出版されている。

歴史研究

東アフリカにおいてアラブ・ペルシャ商人が交易していたスワヒリ地域は、現在のソマリア、ケニア、タンザニア、モザンビークにまたがっている。イスラームが誕生する前から交易は行われていたが、イスラームが誕生してからは、商人たちはイスラームも東アフリカに持ち込んだ。19世紀以降、ドイツの東アフリカ植民地、イギリスの委託統治領となったことにより、アルファベット、ヨーロッパ式教育、キリスト教、サイザル栽培および紅茶栽培など、ヨーロッパの教育、宗教、農作物栽培などが導入されていった。また、東

アフリカからは奴隷が内陸より沿岸部に運ばれ、沿岸部のプランテーションの労働者、もしくは、アラブ地方に送られた。その後、1961年にイギリスから独立し、その後1963年に独立したザンジバル島と合併し、1964年にタンザニア連合共和国が建国された。このような、スワヒリ形成時期、ヨーロッパによる植民地化時代、奴隷貿易時代の歴史研究は、国内外、特に東アフリカを植民地化した宗主国の大学で盛んである。例えば、ダルエスサラーム大学の研究者である Sheriff Abdul (2002) は、東アフリカの歴史に関してイギリスの研究者の文献を参考にしてしている。

言語学

スワヒリ語研究、民族語研究、ことわざ研究、社会言語研究は、主にダルエスサラーム大学とザンジバル島のスワヒリ語研究所で実施されている。タンザニアには120以上の部族が存在し、各々の部族に言語が存在している。そして、もともと文字がなかったため、口頭文芸が発達している。よって、各部族には口頭文芸としてことわざが存在している。アラブ人滞在時代は、アラビア語で表記され、イギリスによる支配後は、アルファベットで表記されるようになった。アラブ人が多く居住していたザンジバル島のスワヒリ語が標準スワヒリ語と認定され、ザンジバル島で使用されていたことわざ (Farsi 1993) も、アルファベットで文字化されている。タンザニアは独立後、脱部族を推奨し、学校での部族語の使用を禁止し、国語をスワヒリ語と認定し、出自部族調査も国勢調査から除外しているが、2017年頃からタンザニア政府対策により、各民族の言語、音楽、慣習などの文化を見直す動きがでてきている。また、各部族語の保存のため、ダルエスサラーム大学を中心にタンザニアの言語学者が一部の部族語の辞書を制作している。

まとめ

タンザニア国内では、人類学研究は主要になってこなかったが、地理的、歴史背景から、考古学、歴史研究、部族研究、言語研究が進んでいるといえるだろう。その内、部族や言語研究はタンザニア国内で、

考古学、歴史研究は宗主国を始め、欧米各国が研究を実施していそうだ。

参考文献

Farsi S.S.
1993 (1958), Swahili Sayings I, Nairobi: Kenya Literature Bureau.

Mhariri J. Ki-zerbo

1999, Historia Kuu ya Afrika, juzuu liliofupishwa, I, Mbinu na Historia ya Awali ya Afrika, Dar es Salaam: TUKI, Dar es Salaam: Chuo Kikuu cha Dar Es Salaam, Paris: UNESCO

Sheriff Abdul

2002 (1987), Slaves, Spices & Ivory in Zanzibar, Woodbridge: James Currey, Nairobi: East African Educational Publishers, Dar es Salaam: Mkuki na Nyota, Athens: Ohio University Press

ドイツの人類学・民俗学

リースラント・アンドレアス (人類学研究所・外国語学部ドイツ学科)

ドイツの学術機関において、人類学・民族学研究は18世紀末から19世紀初頭にかけて、もともとは自然科学の一部として始まった。当時の共通した世界観に基づき、人類文明の研究は2つの領域に細分化された。すなわち、ドイツ語圏の社会を対象とする「Volkskunde」と、ドイツ語圏以外の人間社会を対象とする「Völkerkunde」である。Völkerkundeの研究者は、ヨーロッパとヨーロッパ以外の「Hochkulturen」（高度な文明）を含むグローバルなアプローチと、世界の「Naturvölker」（人類文明発展の初期、より「原始」な段階にあると考えられる部族共同体）にフォーカスする2種類のグループに分けられる。

19世紀後半、ドイツが植民地帝国を形成し始めると、ドイツ占領下のアフリカ、アジア、ミクロネシアの社会がVölkerkunde研究の中心的な対象となった。しかし、すべてのVölkerkunde研究者がこの流れに乗ったわけではなく、ドイツの民族学者と植民地当局との関係はしばしば緊張をはらむものであった。それでもVölkerkunde研究は、ドイツの植民地支配下の人々を従属させ、管理するための有用な道具となった。第一次世界大戦後、ドイツが植民地帝国を放棄することになったとき、Völkerkunde研究の社会政治的な重要性は大きく低下した。しかし、ドイツの非学術的な聴衆にとって、Völkerkundeのテー

マに対する魅力は衰えることなく、Völkerkundeの代表者が遠方への探検や異国人との出会いを語る公開講座は、多くの聴衆を集め続けた。

1933年にナチスの時代が始まると、ドイツの大学を取り巻く状況は大きく変化した。ヒトラーとその支持者たちにとって、人文社会系の大学教育の主な目的はナチス・イデオロギーの普及と定着であり、ナショナリズムを内包するVolkskundeはそのための最適の手段であった。ナチスの時代の末期には、ドイツ国内のほぼすべての大学がVolkskundeを学ぶことができるようになった。これらの大学での教育や研究のほとんどは、ナチ党の人種的優越のイデオロギーを強化するものであった。Völkerkundeの研究機関は政府から多くの支援を得ることができなかったが、ここでも多くの学者が進んで自分の研究を国家イデオロギーと一致させ、ナチ党の「Rassenkunde」（「人種科学」）の研究に関与した。

1945年のナチ体制崩壊後、ドイツはナチ時代の軍国主義や人種イデオロギーから解放された、新しい教育哲学の上に築かれるはずだった。しかし、多くの西ドイツの大学では、この新しい始まりが本当に行われることはなかった。VolkskundeでもVölkerkundeでも、多くのナチス時代の学者が教育や研究のポジションを維持することができたのであ

る。一方、東ドイツの大学では、状況は異なっていた。ここでは、ナチ政権のイデオロギーが、今度はマルクス・レーニン主義の思想に基づく別のイデオロギーにすぐにとって代わられたのである。

1960年代から1970年代にかけて、西ドイツでは Volkskunde と Völkerkunde の改革が進められた。戦後の学生や若い学者たちは、ナチ時代の民族主義や人種差別の精神に根ざした考え方を持つ教授たちの教えを否定した。結局、Völkerkunde と Volkskunde の両学問分野の研究者たちが学生や若い学者たちの行動に対して反応を示し始めた。そして、多くの研究機関が、新しい学問の方向性だけでなく、新しい名称を採用し、「Volk」という不名誉なレッテルから脱却しようとした。

現在、かつての Völkerkunde の研究所で使われている最も一般的な用語は「Ethnologie」（民俗学）で、次いで「Sozialanthropologie」（社会人類学）と「Kulturanthropologie」（文化人類学）である。その他、「Kulturwissenschaft」（文化科学）、「Vergleichende Kulturwissenschaft」（比較文化科学）、「Transkulturelle Studien」（異文化研究）などが使われている。ドイツの Volkskunde 研究所のうち、イエナとキールの研究機関だけが古い用語を使い続け、他のほとんどの研究機関は「Empirische Kulturwissenschaft」（経験的文化科学）または「Europäische Ethnologie」（ヨーロッパ民俗学）に置き換えた。

しかし、これらの用語が一体何を意味し、どのように互いに区別されるのかについては、ドイツの学者たちの間でほとんどコンセンサスが得られていないようである。しかも、これらの慣用句のドイツ語版には、英語版とは異なる意味が含まれていることがほとんどで、それが研究アプローチの本質に関する混乱に拍車をかけている。

さらに、ドイツにおける人類学・民俗学の問題には、もうひとつ複雑な問題がある。それは、ドイツの地域研究の伝統である。ドイツの学者が世界の社会と文化を研究し始めたとき、彼らはほとんど文字資料の分析に頼っていた。その結果、200年以上の歴

史を持つ Indologie（インド学）や Sinologie（中国学）のような文献学が誕生した。その後、これらの文献学は、他の学問分野の研究手法を取り入れるようになり、現在では、人類学や民族学に基づいた研究が、これらの学部一般的な特徴となっている。

以上で、この短いアウトラインを閉じることとしたい。外部から見ると、ドイツの人類学・民族学系学科の現状は、かなり混乱しているように見えるかもしれない。これらの学部の方向性や方法については、ホームページのミッション・ステートメントを熟読することによってのみ、確かな洞察を得ることができる。幸い、今では英語版も増えてきている。

各国の学術機関

ドイツ

Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte - BGAEU
（ベルリン人類学・民俗学・先史学協会）
www.bgaeu.de
研究会 1869年設立

Bundesverband für Ethnolog*innen - bfe
（全国民族学者協会）
<https://www.bundesverband-ethnologie.de/>
フリーランサーの民族学者の協会 2012年設立

Deutsche Gesellschaft für Empirische Kulturwissenschaft - DGEKW
（ドイツ経験的文化科学協会）
<https://dgek.w.de/>
研究会 1963年設立、もとは Deutsche Gesellschaft für Volkskunde（2021まで）

Deutsche Gesellschaft für Sozial- und Kulturanthropologie - DGSKA
German Anthropological Association - GAA
（ドイツ社会人類学・文化人類学協会）
<https://www.dgska.de/> ドイツ語ホームページ
<https://www.dgska.de/en/> 英語ホームページ
研究会 1929年設立、もとは Deutsche Gesellschaft für Völkerkunde（2017まで）

Gesellschaft für Anthropologie - GfA
（人類学協会）
<https://gfa-anthropologie.de/>
研究会 1992年設立

Gesellschaft für Ethnographie - GfE
（民族学協会）
<http://www.gfe-online.org/cms2/>
研究会 1990年設立

Sektion Entwicklungssoziologie und Sozialanthropologie
der Deutschen Gesellschaft für Soziologie – ESSA / DGS
(ドイツ社会学会の発達社会学・社会人類学課)
<https://soziologie.de/sektionen/entwicklungssoziologie-und-sozialanthropologie/portrait>
研究会 1972年設立

Ethnologie in Schule und Erwachsenenbildung – ESE
(学校・成人教育における民俗学)
<http://www.esweb.de/Webcard/index.html>
職能・研究会 1992年設立

スイス

Schweizerische Ethnologische Gesellschaft
(スイス民俗学協会)
<https://www.sagw.ch/seg/> ドイツ語ホームページ
<https://www.sagw.ch/en/seg/> 英語ホームページ
研究会

オーストリア

Anthropologische Gesellschaft in Wien – AG
(ウィーン人類学協会)

<http://ag.nhm-wien.ac.at/>
研究会

雑誌・ホームページ

EVIFA
(人類学ポータル)
<https://www.evifa.de/de>
社会人類学・文化人類学の情報サービス (ドイツ語・英語)

Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Sozial- und
Kulturanthropologie
(ドイツ社会人類学・文化人類学協会報)
<https://www.dgska.de/dgska/mitteilungen-pdf-archiv/>
DGSKA/GAA のジャーナル (上記参照)

Zeitschrift für Ethnologie – ZfE / Journal of Social and
Cultural Anthropology – JSCA
(民俗学雑誌)

<https://www.dgska.de/zeitschrift-fuer-ethnologie/> ドイツ
語ホームページ

<https://www.dgska.de/en/jsca/> 英語ホームページ
民俗学のジャーナル。1869年設立。発行者：DGSKA/GAAと
BGAEU (上記参照)

ネパールの人類学的研究の学術雑誌、学会活動

竹内 愛 (人類学研究所)

ネパールの人類学の学術雑誌

ネパールの社会学 / 人類学研究¹は、ネパールの
国立大学であるトリブヴァン大学中央社会学 / 人類
学科と同大学ネパール・アジア研究所 (Centre for
Nepal and Asian Studies: CNAS) が主要な研究
機関となっている。それらに所属する研究者や学会
メンバーによって編集・刊行される権威のある雑誌
を以下に取り上げる²。

まず、トリブヴァン大学中央社会学 / 人類学科
が刊行する *Ocasional Papers in Sociology and
Anthropology* がある。本雑誌は、1987年から
刊行されており、ネパールの社会学者と人類学者に
とって最も重要な学術雑誌のひとつである。2000
年以降、トリブヴァン大学の複数のキャンパスで社会
学と人類学の修士課程が拡大されたことで、社会
学 / 人類学科の教員が、それぞれの学科で雑誌

を刊行しはじめた。ポカラ市にあるプリトヴィ・ナラ
ヤン・キャンパスの社会学 / 人類学科では、2004
年 から *Himalayan Journal of Sociology and
Anthropology* を刊行している。また、バグルン市に
あるダワラギリ・マルティプル・キャンパスの社会学 /
人類学科では2005年から *Dhaulagiri Journal of
Sociology and Anthropology* を刊行している。ト
リチャンドラ・キャンパスでは、社会学 / 人類学修士
課程の学生により2000年に *Samaj Journal* が創刊
され、2010年からは社会学 / 人類学科の刊行する
雑誌となった。パタン・マルティプル・キャンパスでは、
2011年から *Contemporary Journal of Sociology
and Anthropology* が刊行されている。

大学以外が刊行する社会学・人類学の主
要な学術雑誌としては、ネパール社会人類学会
(SASON) が2010年から刊行する *SASON*

Journal of Sociology and Anthropology がある (Subedi and Uprety 2014: 40)。その他、Local initiative Promotion Trust (NGO) が 2007年から Journal of Qualitative Research Methods を刊行している。

以上の社会学・人類学に限定された雑誌とは別に、1970年代初頭からネパールで出版されている学際的な社会科学雑誌は次の3つである³。1つ目は、1973年から刊行されている Contributions to Nepalese Studies であり、トリブヴァン大学 CNAS によって年2回刊行されている。人類学もテーマとして扱われている。2つ目は、Kailash: A Journal of Himalayan Studies である。Ratna Pustak Bhandar から出版されており、1973年に創刊され、年4回刊行される学術雑誌である。これまでに、ヒマラヤ地域の歴史や人類学に焦点をあてた論文が掲載されている⁴。3つ目に、Martin Chautari⁵ 編 Studies in Nepali History and Society (SINHAS) である。本誌は1996年から刊行されている。以上の三雑誌は、外国人研究者の投稿論文が三分の二以上を占める (Subedi and Uprety 2014:46)。

ネパールにおける人類学の学会活動

ネパールの社会学・人類学の学会としては、1985年、「ネパール社会学・人類学会」(Sociological Anthropological Society of Nepal: SASON) が設立された。ネパール人類学の父として知られるドール・バハドゥール・ビスタが設立のために重要な役割を果たしたといわれている。SASONは設立以来、セミナーの開催、学術図書の出版等を行ってきた。1991年には、はじめて全国大会を実施し、同年、ネパールの人類学に関する国際会議も開催した (McDonaugh 2000:144-148)。その後、活動が盛んでなかったため2013年に一旦活動が停止された。

2016年、ネパール人類学会議が開催され、「ネパール人類学会」(The Anthropological Association of Nepal: AAN) が新たに創立された。会議には125人が参加し、外国人研究者も発表し、基調講演

が行われた⁶。ANNは、2017年に人類学会議を主催したが、その後は開催されていない⁷。

現在の人類学者の学術的交流の場の一つとして、Social Science Baha (NGO)⁸ が、ネパール・ヒマラヤ研究学会、英国・ネパール学術会議、Centre for Himalayan Studies-CNRS、そして、日本のネパール学術ネットワークと共同して開催する The Annual Kathmandu Conference on Nepal and the Himalaya がある。2012年から毎年カトマンズ市で開催されており、人類学の他、分野を越えた研究者たちの研究発表の場となっている。

註

- 1) ネパールでは、社会学と人類学は密接に関連した学問であるとされ、社会学と人類学は同じ学科やプログラムで教えられることがある。学術雑誌においても、社会学と人類学の学術論文は併存している。
- 2) Subedi and Uprety (2014:43) によれば、これらの社会学/人類学雑誌には、社会学/人類学が専門の外国人研究者があまり論文投稿していない (10.9%が外国人、2.2%がネパール人と外国人研究者の共著)。
- 3) その他、Nepal Academy の刊行する Pragya、Martin Chautari の刊行する Adhyayan、Collective Campaign for Peace の刊行する Rupantaran などにネパール人社会学者や人類学者が寄稿している。
- 4) 多くのドイツ、フランス、イギリス、アメリカの人類学者が研究成果を発表している。
- 5) Martin Chautari (MC) とは、1991年に設立され、2002年に非営利組織の研究機関として登録されている。MCでは、研究、ディスカッション・セミナー、出版、図書館、教育の5つを主な役割としており、大学やNGOとも連携を取っている。ネパール国内外の人類学者がMCの主催するセミナーに参加している。
- 6) カトマンドゥポスト (<https://kathmandupost.com/opinion/2017/02/26/separate-ways>) 2023.4.30時点。
- 7) Martin Chautari のスタッフによると、ネパールの人類学会は現状、どれも盛んではなく、アメリカ人類学会に所属する研究者が多いという (2023年3月3日筆者による聞き取り調査)。
- 8) SSBは、ネパールにおける社会科学の研究とその普及を目的として、2002年設立、2007年に正式に登録された非営利団体である。講義、討論、ワークショップ、出版、研究機関との共同研究等を行っている。

参考文献

- McDonaugh, Christian
2000 "The review of Anthropology and Sociology of Nepal: Cultures, societies, ecology and development (Chhetri, Ram B. & Gurung, Om P. ed. SASON.1999)". The European Bulletin of Himalayan Research .19, pp.144-148.
- Subedi, Madhusudan and Uprety, Devendra
2014 The State of Sociology and Anthropology: Teaching and Research in Nepal. Martin Chautari.

オーストラリアの人類学関係の学会組織・雑誌・成果・傾向

ドーマン・ベンジャミン (人類学研究所)

本報告は、アジアとの交流や出版問題に焦点を当てながら、ここ数年のオーストラリアの人類学分野の発展について概説したものである。

オーストラリアにおける人類学に関わる組織

1973年に設立されたオーストラリア人類学会 (Australian Anthropological Association: AAS) は、現在600人以上の会員を擁し、目的は以下の通りである：

- ・人類学を知識の体系的な追求に基づく専門的な学問分野として発展させ、人類への奉仕のためにその責任ある利用を促進すること。
- ・人類学の専門的な研究、知識の共有、実践を促進すること。

同学会は毎年開催される AAS 会議を運営し、学会の主な機関誌となる The Australian Journal of Anthropology (TAJA) を編集している。TAJA は、1931年に Mankind として始まり、1990年に現在の名称となり、オーストラリアに隣接する太平洋およびアジア地域における理論に焦点を当てた分析、および民族誌の報告を含む人類学のテーマを対象とし、歴史のある最も大きな学術誌である。

オーストラリアの 16 の大学には、人類学に関わる学部やセンターが少なくとも 22箇所あり、オーストラリア国立大学には、7つのセンターと学科がある。また、4つの人類学博物館、および6つの政府機関があり、このような数の多さは、オーストラリアの地理的あるいは歴史的な背景のもと、アボリジニ研究、メラネシアやその他の太平洋地域研究、そして先住民の土地請求権や先住民の権利に関する研究といった分野が、人類学的な学問と実践をリードしてきたことを反映している。

オーストラリアにおける人類学の傾向

Tanya Jakimow (2020) が注目したオーストラリアの人類学における最近の 2 つの傾向の第一の特徴は、1960年代以降、なおもアジア太平洋地域に焦点が当てられ、人類学が学問の中心でありつつも、アボリジニ・オーストラリアに関連する研究はより顕著になってきていることだ。人類学者にとり言語研究は極めて重要であり、特にオーストラリアの大学でアジア言語が教えられていることは、アジアの人類学が相対的に比重を占めている大きな要因である。

一方で近年、一部の言語プログラムの衰退は学問分野にとってリスクとなっている。第二の特徴は、開発学との関係であり、オーストラリアの援助はアジア諸国に多く、アジアの人類学は開発学の教育や実践において中心的な役割を果たすべきであると主張することだ。Jakimow 氏は、歴史的に非常に批判的な観点から教えられてきた開発理論を、人類学者が中心となって発展させてきたという立場をとっている (変化しつつあるが)。人類学者と「開発事業」の関わりは、負の側面を持ちつつも、市民の社会グループや活動家を支援することであった。

オーストラリアにおける監査文化と人類学

また Jakimow 氏は、オーストラリアの大学では、監査文化 (audit culture) が多くの分野に影響を与えており、人類学も例外ではなく、監査文化が学術研究に悪い影響を及ぼしているという側面を指摘している。学問にとって重要なエスノグラフィーに時間がかかるということである。オーストラリアの大学では、人文・社会科学の研究に対する公的資金が減少し、教育負担が増加している。研究業績は、STEM 教育 (科学: Science、技術: Technology、工学: Engineering、数学: Mathematics) をモデルにしている。人類学のような比較的引用率の低

い学問はそのために苦難しており、過去20年間、人類学は衰退していると考えている。また、オーストラリア研究会議が行っているERA (Excellence in Research) の結果では、人文地理学や社会学の学科と比較して「世界標準以上」と評価されたのは、11機関中わずか3機関である。そのため多くの人類学者は、他のプログラムに所属せざるを得ない。

Asian Ethnology にも影響する出版問題

監査文化の問題は、アジアでも学問としての人類学に影響を与えるものである。人類学の主要なジャーナルは北米やヨーロッパを拠点としており、欧米の学術構造から外れた学者には、言語、資金、アクセス、レフェリングシステムへの対応など、大きな障壁が存在する。主要な学術誌で出版するべきというプレッシャーから、学者はランキングの低い雑誌では出版しない傾向があり、これは非西洋的な雑誌ではより顕著である。また、アジアを拠点とする研究者は主要な学術誌での出版経験がなく、挑戦しようとしても特殊な執筆スタイルに慣れていないため、論文を投稿するにも時間がかかり、ハードルが高い。そのため後進の研究者を指導しようとしても、その術を持ち合わせていない。

これは、私が Asian Ethnology の共同編集者として、オーストラリアの研究機関に所属する人類学者にアプローチする際に直面した問題である。Asian Ethnology は長い歴史を持ち、名称を Asian Folklore Studies から Asian Ethnology へと変更した 2008 年以降、完全なる双方向の査読システムを採用している。しかしながら、他の独立ジャーナルに比べて大きな支援を受け、かつ重要なランキングシステムで運営されている主要な学術出版社とは提携していない為、自分の出版物を研究業績にカウントする必要があるオーストラリアを拠点とする人類学者にとって、Asian Ethnology での出版は、内容の質がどうであれ、他のジャーナルでの出版に比べてはるかに魅力に欠けるのかもしれない。

出版と World Anthropologies

上記のような出版物の問題を背景に、20 年以上

前から、知識のグローバル化と脱植民地化が急務であり、国によって異なる人類学のアプローチを認識し尊重しなければ、学問としての人類学は弱体化するという認識が広まりつつある。2004 年に世界人類学協会評議会 (WCAA) が設立され、各国の協会が平等になった結果、「World Anthropologies」あるいは、「Global Anthropologies」の発展がみられるようになった。WCAA は機関誌 *Déjà Lu* を通じて、「人類学の知識をグローバルなレベルで多元化することを目指す。覇権的な国際的スタイルや規範の強要を避けるため、著者の出身コミュニティの査読者による学術的判断を尊重するジャーナルである」とした。このジャーナルは、WCAA に加盟する団体のジャーナルから選ばれた論文を再出版し、私たちの国際的なネットワークによって、グローバルな可視性を与える。Asian Ethnology のコンテンツは、この形式にて出版される。

Jakimow 氏は、オーストラリアを拠点とする人類学者がこうした努力の中心的存在であり、多くの人類学者がアジアの人類学者の研究を促進し、彼らが国際的評価を高めるための研究やコミュニケーションの方法を開発するのを支援し、自らの研究をアジアの言語や地域の学術誌で出版していると述べている。Asian Ethnology は、オーストラリアを拠点とする人類学者だけでなく、各国を拠点とする人類学者も、アジアの研究者たちの研究を促進するために尽力していることから、ここでも恩恵を受けている。

学問分野としての人類学に対する圧力がある一方で、オーストラリアを拠点とするアジアの人類学者は、西洋を拠点とする機関に属さない研究者たちとの包括的な交流に境界線を置くことができる監査文化に挑戦し続けている。

参考文献

- Goh, Beng-lan
2015 A Perspective on Anthropology from Southeast Asia. *American Anthropologist*, 117 (2): 379-383.
- Jakimow, Tanya
2020 "Anthropology of/with Asia in Australia." *Asian Studies Association of Australia* <https://asaa.asn.au/anthropology-of-with-asia-in-australia/> Accessed January 20, 2023.

インドネシアにおける人類学研究－組織と学会誌

廣田 緑(人類学研究所・国際ファッション専門職大学)

インドネシアで文化人類学研究が充実している大学機関は、ジャカルタのインドネシア大学(Univrsitas Indonesia)¹、西ジャワ州バンドゥンのパジャジャラン大学(Univrsitas Padjadjaran)²、ジョグジャカルタのガジャマダ大学(Universitas Gajah Mada)³、東ジャワ州スラバヤのアイランガ大学(Universitas Airlangga)⁴だといわれる。本報告の情報提供者、パジャジャラン大学社会科学・政治学部文化人類学科ハルディアン・エコ・ヌルセト教授(Hardian Eko Nurseto)によれば、上記の4大学には興味深い人類学研究を行う教員が多く、そのため文化人類学学科を設ける他大学と比べて、入学希望者が多いのだという。

大学機関が発行する文化人類学系のジャーナルで代表的なものは、Jurnal Antropologi Indonesia (『インドネシア人類学ジャーナル』、インドネシア大学)⁵、Jurnal Umbara (『ジャーナル・ウンバラ』、パジャジャラン大学文化人類学科)⁶、Jurnal Antropologi: Isu-isu Sosial Budaya (『人類学ジャーナル:社会文化問題』)⁷である。これらのジャーナルには、文化人類学に携わる大学教員、研究者、学生が論考を投稿している。

ヌルセト教授によれば、インドネシアにおける文化人類学研究者組織は二つ、すなわちすべての人類学者に開かれた「インドネシア人類学協会」(AAI: Assisiasi Antropologi Indonesia)⁸と、インドネシア国内の人類学領域教員が集まる「全インドネシア人類学学部・学科協会」(ADJASI: Asosiasi Departemen dan Jurusan Antropologi Seluruh Indonesia)である。一般に研究者は人類学研究に関する情報を得ることを目的に、これら両組織に所属するのだという。インドネシア人類学協会入会の条件は人類学出身者であることで、入会登録と年会費が必要となる。現在まで、この協会での活動

はオンラインでのみ行われており、情報共有が主たる目的だったが、最近ではジャカルタからカリマンタン東部への新首都移転に伴い、人類学者がその過程に関与する必要性について訴えるため、政府への謁見を実現している。

全インドネシア人類学学部・学科協会は人類学系教員であれば、自動的に入会したこととなる。毎年の会合ではインドネシアの大学における文化人類学の教育についての討論会が行われる。

ヌルセト教授は、自身が指導する大学生の研究テーマについて、ソーシャルメディア、ジェンダー、食、観光、生態系(自然環境)といったジャンルに興味を向いていると語った。彼の指導のもと人類学を学んだ学生の多くは、UXリサーチやスタートアップの部門で働いているという。インドネシアの文化人類学領域が抱える問題は、インドネシア政府を含め一般的に、人類学という学問があまり知られていないことであり、人類学者の意見とは無縁のところまで政策が決定されていることだとも指摘している。教授は続けて「たとえば現在インドネシア政府が向き合っているカリマンタンへの首都移転についても、準備過程で人類学者が関わり、社会文化についての調査実施、あるいは意見を述べる機会があれば、よりよい政策が可能となるのではないか。今後インドネシアでは人類学領域が無形文化財、観光開発などで政策にも積極的に関わり、学問としての役割を果たしていきたい」とも述べている。

今後は国内の人類学者が国外の研究者ともネットワークを広げるにより、人類学による社会貢献の機会が増えることに期待したい。

註

1) インドネシア大学社会科学・政治学部文化人類学科ホームページ (2023年4月8日アクセス)

2) パジャジャラン大学社会科学・政治学部文化人類学科ホームページ (2023年4月8日アクセス)

- 3) ガジャマダ大学文化科学学部文化人類学科ホームページ (2023年4月8日アクセス)
 4) アイルランガ大学社会科学・政治学部文化人類学科ホームページ (2023年4月8日アクセス)
 5) Jurnal Antropologi Indonesia 『インドネシア人類学ジャーナル』ホームページ (2023年4月8日アクセス)

- 6) Jurnal Umbara 『ジャーナル・ウンバラ』ホームページ (2023年4月8日アクセス)
 7) Jurnal Antropologi: Isu-isu Sosial Budaya 『人類学ジャーナル: 社会文化問題』ホームページ (2023年4月8日アクセス)
 8) AAI: Assisiasi Antropologi Indonesia (インドネシア人類学協会) ホームページ (2023年4月8日アクセス)

ベトナムにおける人類学研究組織

宮沢 千尋 (人文学部人類文化学科)

ベトナムでは、文化人類学は長く「民族学 (dân tộc học)」と呼ばれてきた。anthropology の訳語として「人類学 (nhân học = 人学)」の名称が定着してきたのは 21 世紀になってからであるようだ。

ベトナムにおいて文化人類学的な研究が始まったのはフランス植民地時代であった。1900年にフランス極東学院 (École Française d'Extrême-Orient) が設立された。1930年代になると、ベトナム人研究者のフィールドワークによる村落の祭礼に関する論文が発表されるようになる¹。1945年に独立したベトナム民主共和国で文化人類学の祖と呼ばれているグエン・ヴァン・フエン (Nguyễn Văn Huyền) が、ベトナムの男女の歌垣や、高床式住居の研究によってフランスで学位を取得したのも 1930年代であった。

1945年の独立以降、民主共和国の人類学者の主要な任務は、国内の諸民族の「民族確定作業」を行うことであった。この任務に従事したベトナムの人類学者は、ソ連に留学して学位を取り、ソ連流の人類学理論に大きな影響を受けていた (伊藤 2008: 36-40, 51-75)。

ハノイ総合大学の民族学研究部門は長く史学科の一部であったが、同大学が改組・拡大されたハノイ国家大学人文社会科学大学 (Trường Đại Học Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn Đại Học Quốc Gia Hà Nội) において史学科から独立した人類学科 (Khoa Nhân Học) が設立されたのは 2015年である²。

南部では、ホーチミン市のホーチミン国家大学

人文社会科学大学 (Trường Đại Học Xã Hội và Nhân Văn Đại Học Quốc Gia Thành Phố Hồ Chí Minh) 直属の人類学部門が 2002年に、人類学科が 2008年に設立された³。両大学とも学部と大学院 (修士課程、博士課程) を持っており、教員の中には欧米や日本の大学に留学して博士の学位を得た人もいる。

大学以外のベトナムの学術研究機関として、ベトナム社会科学院 (Viện Khoa Học Xã Hội Việt Nam、現ベトナム社会科学アカデミー Viện Hàn Lâm Khoa Học Xã Hội Việt Nam) があり、修士課程・博士課程があり学位授与も行っている。さらに人類学関係ではハノイに「民族学院 (Viện Dân Tộc Học)」、「文化研究院 (Viện Nghiên Cứu Văn Hóa、旧民間文化研究院 Viện Nghiên Cứu Văn Hóa Dân Gian)」があり、研究活動や研究者養成が行われている。民族学院は *Tạp Chí Dân Tộc Học* (『民族学雑誌]) (伊藤 2008: 62) を、文化研究院は *Tạp Chí Văn Hóa Dân Gian* (『民間文化雑誌]) を発行してきた⁴。大学の教員同様に、これらの機関から欧米や日本に留学して博士の学位を取得した研究者もいる。また、ホーチミン市には上述の社会科学院の分院がある。

この他、ハノイには民族学博物館 (Bảo Tàng Dân Tộc) が 1997年に建設され、展示・研究・博物館学芸員の養成を行っているようだ⁵。

日本の文化人類学会のような全国的な学会は無いようである。

ハノイやホーチミン市の国家大学以外にも、人類学科を設置している大学があるかについては残念ながら調べがつかなかった。他日を期したい。

参考文献

伊藤正子

2008 『民族という政治—ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社

Nguyễn Văn Khoan

1930 “Essai sur le Đình et le culte du génie tutélaire des villages au Tonkin”, *Bulletin de École Française d'Extrême-Orient* 30, 107-139.

註

1) そのような論文の代表的なものとして以下がある。Nguyễn Văn Khoan 1930 “Essai sur le Đình et le culte du génie

tutélaire des villages au Tonkin”, *Bulletin de École Française d'Extrême-Orient* 30, 107-139. 極東学院は1990年代にハノイに再建されたが、文化人類学部門があるかは不明である。

2) ハノイ国家大学人文社会大学人類学ホームページ。Lịch sử & phát triển khoa nhân học – Khoa Nhân học, Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn, ĐHQGHN (nhanhoc.edu.vn) (2023年5月8日アクセス)。

3) ホーチミン国家大学人文社会大学人類学ホームページ (TRƯỜNG ĐẠI HỌC KHOA HỌC XÃ HỘI VÀ NHÂN VĂN - ĐHQG TP.HCM (hcmussh.edu.vn))。(2023年5月15日アクセス)。

4) 2016年1号までの総目録はカントー市図書館が公開している。(http://cantholib.org.vn/muc-luc-btc/van-hoa-nghe-thuat-giao-duc/tc-van-hoa-dan-gian-24.html?download=1&id=0) (2023年5月2日アクセス)。

5) ベトナム民族博物館ホームページ。Bảo tàng Dân tộc học Việt Nam (vme.org.vn)。(2003年5月2日アクセス)。

中国における人類学研究組織—本土と香港の場合

張玉玲 (人類学研究所・外国語学部アジア学科)

中国における社会学、人類学は、20世紀初頭欧米諸国で学んだ留学生によって導入され、当時の中国の現状に適用し、応用させた形でスタートした。1950年頃、社会主義国家建設の理念と相反するとして、社会学、人類学に関連する教育、研究活動は禁止されたが、1980年以降、人類学は社会学の下位分野として復活した。以来、各地の大学で人類学、民俗学を冠した学部、研究所が相次いで設立され、現在教育・研究活動が盛んになりつつある。ここではその一部を紹介する。

中国社会科学院民族学と人類学研究所：中国政府の下に設置された民族問題研究機関であり、中国科学院少数民族語言研究所(1956年)と中国科学院民族研究所(1958年)を前身とする。研究所では、民族学理論、民族文化、資源環境と生態人類学など14の研究室が設けられており、『民族研究』、『民族語文』と『世界民族』(中国語)、International Journal of Anthropology and Ethnology (『人類学民族学国際学刊』)が定期的に出版されている。研究所はまた、中国民族研

究団体聯合会、中国民族学学会、中国世界民族学会、中国民族史学会など、9つの学術団体を所轄管理している。

北京大学社会学人類学研究所：1985年に設立された北京大学社会研究所が、1992年に人類学を取り入れて改名したのが北京大学社会学人類学研究所である。1994年に北京大学人類学と民俗研究センターが設立され、『人類学與民俗研究通訊』を出版している。1995年、民俗学と民族学も取り入れて、中国社会学会民族社会学研究会が成立し、『民族社会学研究通訊』を出版している。社会学人類学研究所では、これまで『社会與發展研究叢書』を9冊、『社会学人類学研究叢書』50冊余りを出版した。

中山大学社会学人類学学院：1927年に設置された国立中山大学語言歴史学研究所(1931年に文史研究所、文科研究所に名称変更)の下に人類学研究グループが設けられ、ロシアの人類学者セルゲイ・シロコゴロフが中心となって、中国南部の少数民族に関する調査を重ねていた。1949年に中山

大学文学院に人類学部が設置されたが間もなく廃止となった。1981年に中山大学が人類学部を復活させ、修士、博士課程も設けた。雑誌『南方人口』の刊行以外、人類学博物館、人類学や考古学及び社会調査の実験室、人口、歴史人類学、華南農村など20以上の研究センターを設置している。中山大学社会学人類学学院は、香港中文大学人類学部、香港科技大学華南研究センターと緊密な連携を続けてきた。後者とは2001年より『歴史人類学学刊』を共同出版している。

厦門大学社会人類学院：1921年大学設立当初設置された社会学学部が社会学と人類学の教育、研究の基礎を築いた。1984年、厦門大学人類学研究所と人類学部が設置され、2019年に厦門大学社会人類学院が誕生した。人類学民族学学部は、社会文化人類学、考古人類学、言語人類学、形質人類学の四つの分野に大別され、修士、博士課程も設けられている。

1984年に設立された人類学研究所は、生物人類学、考古人類学及び言語人類学の三つの研究室が設けられており、文化、形質、言語と考古に関する研究を行っている。また、厦門大学には、中国高等教育機関で最初の、現在でも唯一の人類学博物館が設置されている。なお、1980年に中国百越民族史研究会、1981年に中国人類学学会が厦門大学で発足し、現在でも両学会の事務所が学内に置かれている。

上海大学社会学院：2011年に設立され、社会学部、社会工作学部、人類学と民俗学研究所、人口研究所が設置されている。人類学と民俗学研究所では人類学の修士、博士課程と民俗学の修士課程を設けている。社会学部は1923年に設立され上海大学社会学部を基にしており、1981年より雑誌『社会』、2015年より英文雑誌 Chinese Journal of Sociology を刊行している。

山東大学社会文化人類学研究所 Institute of Social and Cultural Anthropology：2010年12月に設立。山東省における社会・文化に関する研究の促進、山東大学の人類学関連の調査研究の促

進、および国内外の学術交流の促進を目標とし、各種のシンポジウム・講演会の開催以外、『山東大学人類学研究所通説』を定期的に出版する。

香港人類学会 Hong Kong Anthropological Society：1978年に設立された。2023年4月現在香港の8大学の研究者、大学院生、学部生及び社会人を含む約120名の会員を有する。香港歴史博物館と香港中文大学人類学部と密接な関係を持ち、定期的に講演会を開催する以外、オンライン雑誌『香港人類学』および英文雑誌 Asian Anthropology を出版している。

香港科技大学華南研究中心 South China Research Centre：1997年に設立された。センターでは、華南研究資料中心系統が設置され、急速な経済的、社会的発展に伴って失われた民間活動の記録、資料収集に取り組んでいる。『歴史人類学学刊』や『田野與文献：華南研究資料中心通説』、『華南研究文献叢刊』などを出版している。

皇家亞洲學會香港分会 Royal Asiatic Society Hong Kong：1847年設立の皇家亞洲學會中国支会 China Branch of the Royal Asiatic Society が1859年に解体し、1959年に皇家亞洲學會香港分会として復活した。香港に関する研究書籍以外、学会誌『皇家亞洲學會香港分会会刊 Journal of Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society』やニュースレターを定期的に発行している。

以上のように、急速な経済発展の条件とも結果ともいえる、日本や欧米諸国のみでなくアフリカや南米、東南アジアなど従来文化人類学が対象としてきた異民族・異文化との接触範囲の拡大や、中国国内の社会的、文化的激変などに触発されてか、近年中国における文化人類学が顕著な発展を見せてきた。今回は、中国本土及び香港における人類学研究組織の一部について簡単に紹介したが、そのほかの組織についてまたの機会に託したい。

沼澤喜市資料整理プロジェクト報告(2022年度)

加藤 英明(人類学研究所)

本報告は、人類学研究所に所蔵している沼澤資料の整理作業の報告になる。2022年度より、宮脇千絵第一種研究所員のもと、プロジェクト研究員である加藤と人類文化学科の学生3名により、資料のデータベース化を実現するために資料のスキャンを進めている。ここでは、2022年度の整理作業の活動報告と今後の活動を中心に報告する。

沼澤資料は、初代研究所長である沼澤喜市氏の研究および学園・大学行政面の活動によって残された資料になる。2011年頃から、人類学専攻の大学院生により、段ボールに入っている未整理の資料の分類作業がはじまり、2019年度から2020年度にかけて人類学専攻の大学院生2名により、再分類が検討実施され、全資料の情報を記載した目録が完成した(湯屋 2021)。その後、2022年度より、人類文化学科の学生3名を雇用し、スキャン作業を進めている(宮脇 2022)。現在まで、資料の入った封筒497点のうち、封筒63点の資料のスキャンが完了しており、人類学研究所所員と人類学を専攻する大学院生および学部生により継続的に進められている作業になる。

現在の整理作業は、主に資料のスキャン作業と、実物資料と目録¹にのっている資料情報のズレをチェックする作業の2つからなる。1つ目のスキャン作業については、資料をひとつずつスキャンし²(写真1)、スキャンした資料データに対して、目録から、それぞれの資料名を選択しファイル名を付与し、外付けハードディスクにPDFで保存する作業になる。そして、作業が終わったあとに、作業記録ノートに作業

内容および作業過程で生じた注意点や問題点を記載し、研究所員と学部生で、それらを共有しながら進めている。主な問題点や注意点としては、経年劣化の進んでいる資料(写真2)や色彩がスキャナーで反映されにくい資料が見られることである。そのような資料はスキャンせず、デジタルカメラを用いて直接撮影し記録する方法を予定している。また、メモをホッチキス止めしている資料も多く見られる(写真3)。その場合、上部のメモと、その裏側の隠れた資料の双方をスキャンし保存しており、資料に書かれているすべての文字をスキャンする、という前提のもと作業を進めている。

2つ目は、実物資料と目録のズレをチェックする作業である。2020年度に目録が完成し実物資料と紐づけられたが、資料のスキャンを進める過程で、どうしても、目録に記載されていない新たな実物資料や、目録の誤り、記載漏れが見つかることがある。たとえば、手紙や電報、地図、商業チラシや広告、写真のネガなどの資料が、授業ノートや抜刷、原稿などのワーキング・ペーパーの間に挟まり新たな資料として見つかる場合や、2種類の実物資料があるにもかかわらず、片方の資料しか目録に載っていない場合などである。そのため、そのようなズレを修正するために、新たに見つかった実物資料に対して、あらためて枝番号を付与し目録に追記している。たとえば、資料101(1/14)に挟まっていた資料が見つかった場合、資料101(1/14-2)と枝番号を付与し記載している。そして、その際には、どのように資料情報を目録に記載するのか検討し、判断に迷った場合に

は研究所員と学生で、適宜話し合いながら決めている。実物資料を目録に紐づけし³、できるだけ不一致が生じないように確認しながら作業を進めることで、データベース化を見据えた基盤づくりをおこなっている⁴。

また、今後の活動としては、引き続き、資料のスキャン作業をしながら、目録のチェック作業を進めていく作業となる。2022年度は、資料のスキャン作業に多くの時間を割くかたちとなったが、現状、全体の2割ほどしかスキャンができておらず、完成にはまだほど遠い状況にあるといえる。そのため引き続き、資料のスキャン作業に時間を費やしていく予定である。2023年度は新たに人類学専攻の大学院生が1名加わったため、前年度よりもスキャン作業のペースが進むと考えている。

その一方で、資料の活用方法についても、少しずつ考えていく必要がある。沼澤資料は沼澤喜市氏の研究活動と大学行政および授業関連の資料が主になるが、とくに、そのなかで、南山大学東ニューギニア学術調査団に関連する資料は資料的価値が高いものといえる。調査団は、戦後初の科学研究費の支援を受けた海外調査団であったこと、人類学上の空白地帯となっていた東ニューギニア高山地帯の調査であったこと、地元の企業や南山大学を営むカトリック神言会の協力のもと進められたことなど、南山大学だけでなく、学術的・地域社会的にも、当時期待の大きかった調査であり、それにともなう収集成果もあげていたと考えられている（クネヒト 1998: 84-85, 103）。しかし、収集した資料の多くは、未整理・未発表のままとなっている。そのような資料には、たとえば、予備調査のフィールドノート（写真4）、調査地の子どものクレヨンによる絵、住居に関する図版、身体各部の呼称、研究計画書や交付申請書、荷物リストにいたるまで多くの資料が残されており、調査実態の全体像を解明するうえで必要不可欠な資料になると考えている⁵。

最後に、資料作業を報告する意義についても触れておきたい。現在、デジタル技術の発展にともない、データベース化の対象が、博物館、図書館、文書館

だけでなく、大学、国・自治体の行政資料、企業の産業資源へと広がりつつあり（井上 2021: 83）、多様な分野でデータベース化の方法が模索されている。しかし、組織や資料の性質の違いから、ひとつの方法論に当てはめることが難しいのが現状であり、さまざまな分野からのデータベース化の実技事例の報告が求められていると考える。今後、沼澤資料の作業過程を継続的に記述することも、データベース化の一事例を提供するうえで、意味のある作業のひとつになると考える。

註

1) 目録は、沼澤資料のスキャン作業を進めるうえで、もっとも重要な管理ツールのひとつになる。すべての資料名と資料内容が記載されているエクセルデータであり、各資料に対して、それぞれ資料形態、著作者、作成年、タイトル、件名標目などが記録されている。2019年度から2020年度にかけて、当時、院生であった湯屋氏と黒川氏により作成されたもので、現在では、この目録を管理台帳とし作業を進めている。

2) 資料は、封筒に入れ、その状態でもんじろ箱に入れ人類学研究所3階の書庫に保管している。また、スキャンは、エプソンのA3ドキュメントスキャナー（DS-70000）を使用しておこなっている。スキャンの解像度は300dpiに設定している。その理由として、300dpi～400dpiが一般的であること、解像度を過度に上げるとデータが重くなるためである。

3) 資料管理においては、実物資料と情報の紐づけの重要性が指摘されている（笹倉 2000）ほか、情報にのっていない実物資料をめぐる事例から、資料継承の課題を提起した報告もあり（如法寺 2017）、実物資料と情報のズレが、データベース化の運営業務に問題をもたらす可能性が示唆されている。

4) データベース化を含むデジタル機器・サービスの基盤がいかに形成されるのかという点については、その基盤形成をインフラストラクチャーとして捉えるハンナ・ノックスの人類学的研究が参考となる（Knox 2021）。

5) クネヒト・ベトロ氏は、これらの未整理・未発表の資料に対して、「『眠りの森の美女』のように起こしてくれる王子を待っている」（クネヒト 1998: 102）とし、資料の埋没に対する警笛をならしつつ、その資料的価値の高さを評している。また、沼澤喜市氏の手帳を用いて、南山大学ニューギニア学術調査団の具体的な調査行動についても報告している（クネヒト 1998）。ほかにも調査団の考古学班であった早川正一氏提供の動画や写真資料を用いた博物館展示も実施されている（山崎 2007; 木田 2008）

参考文献

井上透 2021 「多様な分野からデジタル化を学ぶ」『デジタルアーカイブ学会誌』5 (2): 83-85。

木田歩 2008 「博物館における映像資料の可能性：特別展『フィールドの記憶——生誕100年——人類学者沼澤喜市のニューギニア調査写真から』を振り返って」『南山大学人類学博物館紀要』26: 11-28。

Knox, Hannah 2021 Traversing the infrastructures of digital life. In: Digital anthropology. Haidy Geismar and Hannah Knox (eds.), pp. 178-196. London: Routledge.

クネヒト・ベトロ 1998 「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」『アカデミア（人文・社会科学編）』67: 83-108。

宮脇千絵 2022 「沼澤喜市資料整理プロジェクト報告」『人類学研究所通信』22: 41。

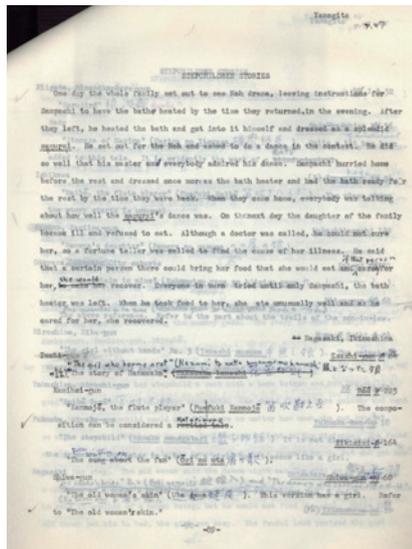
如法寺慶大 2017 「博物館資料の継承に向けて -南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の資料番号の歴史的検討から-」『アルケイア-記録・情報・歴史-』11: 139-177。

笹倉いる美 2000 「北海道立北方民族博物館の所蔵資料とその整理について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』9: 85-103。

山崎剛 2007 「人類学のための映像資料、博物館のための映像資料:2006年度ニューギニア資料整理作業の報告と課題」『南山大学人類学博物館』25: 73-86。

湯屋秀捷 2021 「沼澤喜市資料整理報告」『人類学研究所通信』21: 16-17。

アルバイト学生によるコメント



私は一年間沼澤先生が遺した資料のスキューンを行ってきましたが、その中でもとりわけ印象に残ったのがこの資料(資料99)です。

この資料では日本各地に伝わる民話の題名が英語に翻訳され、また同時にそれぞれの地域での民話の題名、すなわち民俗語彙が併記されています。

私がこれまでスキューンしてきた沼澤資料の種類としては民族学のジャーナル、手書きの講義用の資料、エッセイといったさまざまな種類の資料があり、雑駁な印象を受けました。

それらの資料群のなかで、この資料が最も民族学的な資料であると感じたので選びました。

民話のタイトルのなかにはこれまで見たことのないタイトルのなかに「三年寝太郎」のようなよく見知った話も含まれていて、これまでそういった伝承を民族学的視点から見たことはなかったもので、これまでとは違う新鮮な観点を得ることができ、面白く感じました。

近藤宏紀(人文学部人類文化学科)



写真1 スキューン作業



写真2 経年劣化の進んでいる資料

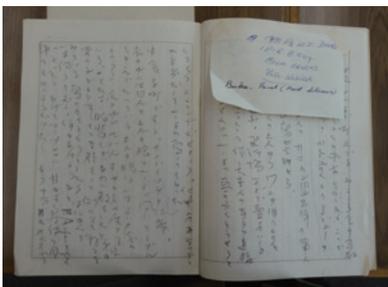


写真3 メモをホッチキス止めている資料



写真4 1964年のフィールドノート(予備調査)

2022年度国際化推進事業の事業概要と今後の計画

張 雅 (人類学研究所)

南山大学人類学研究所では、これまで多様なテーマにわたるシンポジウム・講演会・学会の分科会などを通じて、国内外の研究者との連携を深めてきた。この度2022年4月から、研究所は引き続き国内外の研究者とのネットワーク構築を目指し、特に中国をフィールドとする人類学者とのより密接な連携するための第5期の国際化推進事業を開始した。

第5期の国際化推進事業は「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から」というテーマで、ローカルなモノの生産や流通が、グローバルな人や情報の往来の中でいかに展開し、他者とのネットワークがどのような形で構築されているのかという課題を策定した。近年、人類学全体の動きを見渡すと、よりグローバルに展開する人びとの営みに着目するようなテーマ研究へと大きく転換している。たとえば、移民・観光・紛争・災害・メディアといった事象は、世界に跨る複数の地点での調査・分析とマクロな視点を要することが理解しやすいテーマといえる。しかしながら、表面的には、小さな地域社会に根ざしたもののように見える人びとのなりわい（畑仕事、漁撈、衣服作り、おみやげ製作、露店での商いなど）もまた、本人たちには由来不詳の人・モノの移動に支えられ、国際政治・経済の動向に左右されていることに気づかされる場面は多い。とりわけ、海産物や農作物、衣服や身の回り品といったローカルに根ざしたモノの生産が、行商や小売りといった小規模な流通を経て国際商品化している様は、近年、日本や中国を含め国境を超えた人びとの移動とも相互に影響しあっている。以上のことを踏まえ、本事業

は、世界各地のローカルな場に密着したさまざまな種類の稼働労働（これを、「なりわい」とする）に着目し、①原材料・生産のための道具を調達し、②人を集めて商品・サービスを生み出し、③消費者のもとに届けるという一連のサイクルの重なりがいかにグローバルな状況のなかで展開しているのか、さらにそれぞれのプロセスにおいて、他者とのネットワークがいかなる形で作り上げられているのかを探ることを共通課題として掲げる。

2022年は新型コロナウイルスの影響で海外拠点研究員(カウンターパート)を訪問することが叶わなかったため、日本国内の研究者らとの講演会実施の調整する方向へ転換した。2022年度の国際化推進事業は「現代中国における EC サイトの拡大—ひと・もの・情報の移動の新たな展開」という講演会シリーズを企画した。本講演会シリーズでは主に、Eコマースという商品販売のビジネスモデルの浸透に伴いボーダーレス化が進行する中で、中国におけるひと、もの、情報の交換がどのような新たな様相を呈示するようになっているのかを考察していく。これまでの中国では、露天市、商店、ショッピングモールなど実店舗での売買が中心だったが、2000年代後半から、Eコマース事業が急速に拡大したことにより、販売形式や物流・運送、広告効果などの面で従来の実店舗における対面式の売買とは異なる変化もたらされた。こうした状況は、商品供給の拠点でのライブ配信を通して商品を販売するという新たな職業の誕生ももたらした。「ライブ配信村」(浙江省義烏江北下朱村)や「タオバオ村」(浙江省義

烏青岩劉村。タオバオとは、中国大手のECサイトの名称)では、商品の生産者とインフルエンサーが集まることで、地域の活性化と住民たちの就職難の解決にもつながるといふ効果が見られている。このように、Eコマースという新たなビジネスモデルの発展に連動して、浙江省義烏のように、もともとは小型商品問屋の集積地として知られた空間が、別の形でさらなる発展を遂げているのである。

私は2022年11月11日にEコマースのビジネスモデルの発展による商業集積地の変化を巡って優れた研究成果を数多く出す法政大学李瑞雪先生の研究室へ訪問し、2022年12月講演会の開催における事前の打ち合わせを行った。李瑞雪先生に本事業への協力の要請をし、論文の執筆の依頼などをお願いした。そして、2022年12月3日、法政大学の李瑞雪先生をお迎えし、「寒村で越境ECビジネスの集積がなぜ生まれたのか～義烏の物語～」と題した講演会を対面・Zoom Meetingのハイブリッド方式で開催した。この講演会では李瑞雪先生に義烏農村におけるEC集積の生成理由について、義烏の「リーズナブルな物流サービス」や「仕入れの

好条件」、「インフラ整備」などといった魅力的な側面から解説していただいた。質疑応答では、参加者から「義烏はどのようにして小商品の商業集積が進んだのか」、「教育機関はどのような経緯で義烏に進出したのか」、「宅配運賃はどのように決まるのか」など数多くの質問が寄せられ、予定時間をオーバーするほどの活発な討論が行われた。今回の講演では中国における商品集積地の形成と発展の経緯をうかがうことができただけでなく、中華圏の研究者と交流する貴重な機会ともなった。

2023年度は新型コロナの収束がようやく見えてきたことで、各国の研究者らのは国境をまたぐ学術的交流を進める研究活動の活性化も見込まれている。今後、「なりわいと移動の人類学」を主題とする国際化推進事業は引き続き、中華圏の研究者との更なる連携と交流を図っていきながら、日本国内で国際化推進事業を促進している有力大学と協力し、シンポジウムの共催も計画する予定である。人類学に特化する研究所の所員と中華圏の研究者との間の対話を重ねることを目指し、新たな研究とネットワークを構築することを望んでいる。

活動報告 [2022年度]

シンポジウム

第1回 公開シンポジウム

「空間を読み解く考古学」(西江清高教授退職記念)



日時 2023年3月5日(日) 13:30 ~ 17:30

会場 南山大学 Q 棟104教室 および オンライン (Zoom)

主催 南山大学人類学研究所

共催 人文学部人類文化学科、人間文化研究科人類学専攻

プログラム 「挨拶」渡部森哉(南山大学人類学研究所・所長)
「趣旨説明」西江清高(南山大学人文学部人類文化学科・教授)
「地理空間情報の「多層性」と考古学—考古学GISの視点と実践—」渡部展也(中部大学国際GISセンター・教授)
「秦代驕嶺的空間」路国権(山東大学歴史文化学院・教授)
／「通訳」角道亮介(駒澤大学文学部・准教授)
「空間を読み解くさまざまな階梯—中国考古学の事例から—」西江清高(南山大学人文学部人類文化学科・教授)
質疑応答

司会 渡部森哉

空間をキーワードに、考古学データを読み解くというテーマに関する中国考古学のシンポジウムが開催された。

はじめにGISの専門家である渡部展也先生が、考古学GISデータとGISを組み合わせることによって、どのように遺跡の分類、地域区分ができるかについて講演された。考古学のみならず他の分野にも応用できる汎用性のある手法が紹介された。

次に中国の山東大学歴史文化学院・教授の路国権先生が、自身が発掘調査に従事した遺跡の空間構造について講演された。中国語での講演であり、角道亮介先生による日本語への分かりやすい翻訳により参加者全員が理解することができた。世界最先端のデータに接することのできる貴重な講演であった。なお中国からのZoom参加であったが、講演中、接続はスムーズであったことは幸いであった。

西江清高先生の最終講義「空間を読み解くさまざまな階梯—中国考古学の事例から—」は、先生の中国考古学研究の歩みをたどりつつ、どのように空間概念が洗練されていったのかについてであった。1時間50分にわたる大講演であり、これまで未発表の研究も紹介された。

本シンポジウムは西江清高先生の退職を記念して開催された。最後に花束贈呈、および写真撮影が行われた。本シンポジウムには約50名が参加した。
(渡部森哉)

第2回公開シンポジウム 「後藤明先生の研究の歩みと四人の巨人」 (後藤明教授退職記念)



- 日時 2023年3月11日(土) 13:30 ~ 17:30
- 会場 南山大学 Q 棟104教室 および オンライン (Zoom)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 共催 人文学部人類文化学科、人間文化研究科人類学専攻、中部人類学談話会
- プログラム 「挨拶・趣意説明」 渡部森哉(南山大学人類学研究所)
「学問上の四人の「巨人」」 後藤明(南山大学人類文化学科/人類学研究所)
「北方研究の立場から」 大西秀之(同志社女子大学)
「物質文化研究の立場から」 角南聡一郎(神奈川大学)
「オセアニア考古学の立場から」 石村智(東京文化財研究所)
討論
- 司会 渡部森哉

本シンポジウムは2023年3月末で南山大学を退職される後藤明先生の記念シンポジウムであった。通常の最終講義とは異なり、後藤先生の基調講演の後に、関連する3つの講演が続き、最後に討論の時間が設定された対話型のシンポジウムであった。本シンポジウムの4名の登壇者に共通するのは、考古学から出発して、その後人類学など隣接分野の専門家となったということである。

はじめに後藤先生が、自身の研究に多大な影響を与えた4名の研究者を取り上げ、その研究内容、および後藤先生との関わり、影響について説明した。

いずれも故人となられているが、その研究が後の研究者にどのように受け継がれているかが分かる内容であった。

大西先生の講演では、北方研究の立場から、渡辺仁、大林太良の研究の位置づけについて説明された。特に南方研究との比較に焦点を当て、様々な問題提起を行った。角南先生の講演では、物質文化研究の立場から、特に大林多良、遠藤庄治の研究が位置づけられた。石村先生の講演では、篠達先生の研究の中で特にタブタブアティア遺跡と住民との関わりについて解説された。

登壇者4人によるディスカッションの後、最後に花束贈呈、および写真撮影が行われた。本シンポジウムには、対面形式、オンライン形式を合わせて約90名が参加した。(渡部森哉)



公開講演会

第1回公開講演会 Social Class and Education in England and Japan: Examining Middle-Class Boys' Schools



日時	2022年6月10日(金) 14:00 ~ 15:30
会場	Zoom Webinar (オンライン)
主催	南山大学人類学研究所
講師	Robert Aspinall (同志社大学)
コメンテーター	Michelle Henault Morrone (名古屋学芸大学)
司会	Dorman, Benjamin (人類学研究所・第一種研究員)
使用言語	英語
プログラム	14:00~14:05 Introduction (Dorman, Benjamin) 14:05~14:45 Lecture (Robert Aspinall: Doshisha University) 14:45~15:05 Comment/Response (Michelle Henault Morrone: Nagoya University of Arts and Sciences) 15:05~15:30 Q&A

This webinar, while grounded on the speaker's experience at three boys' schools, two in England (as a student in one school and teacher in another) and one in Japan, focused on the connection between schooling and social class. Through introducing

vignettes from the speaker's own biography related to each institution in order to explain the role of middle-class boys' schools in contemporary capitalist societies, he took a comparative approach to the UK and Japanese situations. He also examined the historical evolution of these kinds of schools within the context of the respective countries' educational philosophies and social environments. After discussing the schools he was involved with in some detail, he presented some of the ways in which these schools are involved in social class reproduction, including the ways in which boys are selected to enter the schools, the 'ethos' of each school, and the ways the schools help boys in the next stage of their development as middle-class young men. Finally, he noted that since the 1970s England and Japan have become steadily more unequal. Although progress has been made to reduce discrimination based on gender, race and sexuality, he argues that reforms to secondary education - many of which have been labelled as "progressive" - have worked to the advantage of the middle classes, thus contributing to widening inequality based on social class. Finally, the discussions that followed included thoughts on homeschooling in Japan and the UK promoted by a question from an attendee. The speaker, respondent, and host shared insights into their own experiences in different educational systems.

The webinar was attended by 17 participants in all, including the speaker, respondent, and host (14 attended from Japan, and 1 each from India, China, and Australia).

(Dorman, Benjamin)

第2回公開講演会

「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのかー義烏の物語ー」(国際化推進事業「なりわいと移動の人類学」関連「現代中国における EC サイトの拡大ーひと・もの・情報の移動の新たな展開」シリーズ No.1)

南山大学人類学研究所
南山大学人類学研究所2022年度第二回公開講演会
国際化推進事業「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から」関連企画
寒村で越境ECビジネスの集積がなぜ生まれたのか
～義烏の物語～
2022年12月3日(土) 13:30-15:00
会場：南山大学G棟G27教室(会場+zoom入室可能時刻 とともに13:00)
対面・オンラインのハイブリッド開催(zoom利用) 言語：日本語
講演者：李瑞雪教授

プログラム

13:30	趣旨説明	張雅(南山大学人類学研究所研究員)	参加費無料 要事前申込
13:35	「寒村で越境ECビジネスの集積がなぜ生まれたのかー義烏の物語ー」	李瑞雪(法政大学教授)	
14:35	コメント	張玉玲(南山大学教授)	
14:45	質疑応答		
15:00	閉会		

趣旨
本講演会は南山大学人類学研究所の国際化推進事業「なりわいと移動の人類学：中華圏の研究者との協同から」の中で、「現代中国におけるECサイトの拡大ーひと・もの・情報の移動の新たな展開」講演会シリーズ第二回公開講演会として企画され、Eコマースのビジネスモデルの拡大による商業集積地の発展をはじめ、物流網・運送技術の拡大と向上、消費者の消費行動、広告発信の変化を見据えながら、ひと、もの、情報の新たな展開について検討するものである。

申込方法
対面・オンラインを開かず事前に下記のURLまたはQRコードからお申込ください。登録締切：12/3日 13:30
<https://app.nanzan.ac.jp/regform/regist/univ/jinruikenreception/20221203>

お問合せ
南山大学人類学研究所
〒466-8673 名古屋市中区昭和山1-1-1
TEL: 052-932-2111(代表)
E: ai@nanzan-u.ac.jp / jinruiken@nanzan-u.ac.jp
O: 人類学研究所で検索

会場アクセス
南山大学 名古屋キャンパス
〒466-8673 名古屋市中区昭和山1-1-1
・地下鉄 名城線「八事」下車 徒歩約8分

- 日時 2022年12月3日(土) 13:30 ~ 15:00
- 会場 南山大学 G 棟 G27教室 および オンライン(Zoom)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 講師 李瑞雪(法政大学)
- 司会 張雅(人類学研究所・非常勤研究員)
- 使用言語 日本語
- プログラム
 - 13:30 ~ 13:35 「趣旨説明」 張雅(南山大学人類学研究所・非常勤研究員)
 - 13:35 ~ 14:35 講演「寒村で越境 EC ビジネスの集積がなぜ生まれたのかー義烏の物語ー」 李瑞雪(法政大学・教授)
 - 14:35 ~ 14:45 「コメント」 張玉玲(南山大学人類学研究所 / 外国語学部アジア学科・教授)
 - 14:45 ~ 15:00 質疑応答

南山大学人類学研究所は2022年12月3日、法政大学の李瑞雪教授をお迎えし、講演会を対面・Zoom Meetingのハイブリッド方式で開催した。対面では8名、オンラインでは研究者や学生など15名、合計23名ほどの参加があった。

この講演会では李瑞雪教授に義烏の農村におけるEC集積の生成理由について、義烏の「リーズナブルな物流サービス」や「仕入れの好条件」、「イ

ンフラ整備」などといった魅力的な側面から解説していただいた。講演後、南山大学の張玉玲教授から、今回の講演では海外に移住した人々の商売のバックグラウンドとなる中国における商品集積地の形成と発展の経緯を伺うことができたことで、Eコマースという商品販売のビジネスモデルに関する知見を深めることができたコメントしていただいた。

質疑応答では、参加者から「教育機関はどのような経緯で義烏に進出したのか」、「宅配運賃はどのように決まるのか」などの質問が寄せられ、活発な討論が行われた。

「なりわいと移動の人類学」を主題とする国際化推進事業による今回の講演会は中華圏の研究者と交流する貴重な機会となり、今後も中華圏の研究者との更なる連携と交流を図っていくことが期待される。(張雅)



人類学フェスティバル

人類学フェスティバル 2022



- 日時 2023年1月22日(日) 11:00~16:00
- 会場 南山大学 R 棟1階(ホワイエ、応接室、会議室)
- 主催 南山大学人類学研究所
- 共催 南山大学人文学部人類文化学科・外国語学部アジア学科

1. 学生の研究発表

Presented by 藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ、上峯篤史ゼミ (以上、南山大学人文学部人類文化学科)、張玉玲ゼミ (南山大学外国語学部アジア学科)、岡部真由美ゼミ (中央大学現代社会学部)、東賢太郎ゼミ (名古屋大学文学部)、二文字屋脩ゼミ (愛知淑徳大学交流文化学部)

会場：R 棟1階 ホワイエ

2. アンソロポリウム：人類学は地球を俯瞰する

Presented by 後藤明ゼミ有志



◆上映時間:12:00 ~ 13:05(1回目)、15:00 ~ 16:05(2回目)

◆上映内容:

- (1) 「アンソロポリウム 2021」の天体ショー再現(約30分)
- (2) 「卑弥呼の見た星空 PART1& PART2」映像と天体ショー「卑弥呼は南十字星を見たか?」解説(約30分)
- (3) 後藤ゼミ「アンソロポリウム・フィナーレ」: キャンパスから飛び上がり、月から地球を眺める「人類学は地球を俯瞰する」映像解説(約5分)

3. 金沢の人ともの

Presented by 2022年度フィールドワーク (文化人類学)

I1受講生



◆体験

- ・フィールドワークすごろく
- ・さかなのペーパークラフト

◆展示

- ・調査報告(ポスター)

4. 在日インド人との

Presented by 2022年度フィールドワーク (文化人類学)
I2受講生



- ◆ インド風の歓迎
- ◆ インドの伝統的な衣装(サリーとDhoti)を着るコーナー
- ◆ インド・在日インド人についてのクイズ

5. 様々な石材を利用した石器づくり実演会

Presented by 石器研究グループ (南山チャレンジプロジェクト)
・石器づくりの実演と体験

3年ぶりの対面実施となった今回は、R棟1階のホワイエ、応接室、会議室で開催した。久しぶりの対面実施のため、会場下見や必要備品の手配など事前準備に時間も要したが、当日は11時の開始前から、有志の学生たちがパーティーを運んだり、ポスターを貼ったりと設営準備を手伝ってくれた。

多くの学生が参加したメインのイベントは卒論に向けたポスター発表と口頭発表である。ポスター発表は、ホワイエにパーティーを配置し、A0サイズに印刷したポスターを掲示しておこなった。南山大学人文学部人類文化学科(藤川美代子ゼミ、宮沢千尋ゼミ、上峯篤史ゼミ)、外国語学部アジア学科(張玉玲ゼミ)のほか、中京大学現代社会学部(岡部真由美ゼミ)、名古屋大学文学部(東賢太郎ゼミ)、愛知淑徳大学交流文化学部(二文字屋脩ゼミ)から

49名がエントリーし、3部に分かれて力作揃いのポスターを囲んで活発な議論をおこなった。口頭発表には9名がエントリーし、パワポ資料を用いて卒論に向けた10分の研究発表をおこなった。事前に提出されたポスター資料や口頭発表の要旨を『要旨集』としてとりまとめ配布していたため、それぞれの関心に基づき計画的に意見交換ができたと思う。

また対面実施となったことで、企画も盛りだくさんとなった。後藤明ゼミの企画は昨年でファイナルだったが、今年もゼミ生有志によって「アンソロポリウム：人類学は地球を俯瞰する」として開催された。会議室で天体ショーの上映と解説がおこなわれた。

人類文化学科のフィールドワーク実習からも、成果発表として2つの企画が出された。「金沢の人との」(担当：藤川美代子)では、学生それぞれがテーマを定めて調査した事柄に関する展示や、手作りのすごろくやぬり絵のコーナーが人気だった。同じくフィールドワーク実習の「在日インド人との」(担当：アントニー・スサイラジ)では、豊富な写真資料展示や、国立民族学博物館の「みんぱく」を借りての衣装展示のほか、クイズコーナーが盛り上がりを見せた。

南山チャレンジプロジェクトから助成を受けている石器研究グループ(代表：安江太良)は、石を削って石器をつくる実演を通じて貴重な体験を提供してくれた。

他大学からの参加が始まって以来、はじめての対面実施だったこともあり、1日を通じて非常に活気ある場となった。新型コロナウイルス感染対策のもと、参加者は100名を上限とし、一般の方々に広く参加を呼びかけることは叶わなかったが、学部や大学の垣根を超えた交流が学生たちの研究に刺激となったことだろう。(宮脇千絵)

参加学生によるコメント

宮沢ゼミ（人文学部人類文化学科）

私は今回の人類文化学フェスティバルで、「若者の恋愛観における教育の影響」という題で口頭発表をさせていただきました。私は卒業論文を書くということに対して自分の中のハードルをかなり上げており、どのように書いていくのか戸惑いを感じていました。自分のテーマについても調べ足りないことが多く、不安でした。しかし、フェスティバルで文化人類学に関わる多くの方と交流し、先生方やその他参加者の皆様から今後の参考になる意見をいただき、自分の研究の方向性を決める大きな手掛かりとなりました。フェスティバルに参加させていただきありがとうございました。（塩沢柚衣）

人類学フェスに参加したことで、アドバイスや意見がもらえたり、多大学の学生とも交流したりすることができ有意義な時間だった。私は口頭発表を行ったが、発表をしたことによって、自分が何をやりたいのかが少しずつ明確になり、頭の中を整理することもできた。他ゼミの友達の卒論のテーマや他大学の学生のテーマを知り、似ているテーマの人と話して意見を聞くなど、普段の大学生活ではできない経験ができた。また、ポスター展示や口頭発表だけでなく、フィールドワークの展示やプラネタリウムなどの企画もあり、充実していた。（中村文音）

藤川ゼミ（人文学部人類文化学科）

人類学フェスに参加し、他ゼミや他大学の学生から意見を貰えたことは、新しい角度から自身の卒業論文について考え直すいい機会となった。ポスター発表の際には、テーマや内容を客観的に見直すことができ、多くの感想、意見を他学生から得る中で、新たに取り組みたい論点や問題点に対しての改善策

を見つけることができた。また、同じような興味関心を持つ人、同じ人類学でもまるで異なるトピックをテーマにしている人の発表を聞く機会を得られたことは、今後の論文作成への刺激となった。それぞれの研究がこれからどう深まっていくのか非常に楽しみに感じたと同時に、今後どこかのタイミングで、意見や成果を共有できるような機会があればと思う。（中島望）

岡部ゼミ（中京大学現代社会学部）

私はポスター発表が初めてで、他の大学の方との交流もほとんどなかったので、人類学フェスティバルでの経験はとても貴重な時間でした。同じ人類学や文化系の学部でも、それぞれの研究内容が違い、まとめ方にもそれぞれ違った特徴が出ていたため、とても面白かったです。コアタイム開始直後はうまく伝えられるか不安でしたが、一度話し始めると緊張も解け、相手の考えやアドバイスをいただくこともでき、参考になることばかりでした。また、ポスター発表や口頭発表以外にも、クイズや実物の展示があり、学びながら楽しめました。今回学んだ経験を今後の研究に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。（安藤里紗）

大学生活の中で他大学の学生と交流をしたり、様々な人の研究について知る機会はなかったため、とても有意義な時間となりました。自分のポスター内容と近いことに関心を持っている方もおられましたが、テーマは近くても調査方法や目の付け所は人それぞれだったので、そのような、自分では考えることができていなかった部分について知ることができたのはとても参考になりました。また、今までインドや石器などについて知る機会はなかったので、そのような新たな分野についても興味を湧いた良い機会となりました。（丹下愛絵）

東ゼミ（名古屋大学文学部）

人類学フェスティバルへの参加は、卒業論文に向けた研究の大きな力になったと感じます。ポスターの製作は研究の方向性や調査方法など自身の研究についてより具体的に考える良いきっかけになり、コアタイムでの発表の時間などで意見をもらってさらに考えを深めていくことができました。また、他の方の発表では、今社会的にも関心の強いテーマから身近なテーマまで、非常に幅広く個性的なテーマが揃っていて、人類学という学問の特色と良さを感じるとともに、実際に一対一で話すことでより詳しく意見を交流することができ、とても良い刺激をもらえました。他の大学の同学年の方とこのように交流できる非常に貴重な機会に参加できてとてもよかったです。ありがとうございました。（山崎久美子）

二文字屋ゼミ（愛知淑徳大学交流文化学部）

初めてのポスター発表だったので、自信がありませんでしたが、当日は内容やポスターデザインに対するお褒めの言葉をいただくことができました。そして、発表に対して自分とは違う視点からのご指摘をくださり、こちらからの質問にも快く答えてくださったので、新たな気づきも沢山ありました。今後の卒論研究に向けてより一層頑張ろうというモチベーション向上に繋がりましたし、発表に向けた準備期間を含め、当日は短い時間ではありましたがとても充実したものになったのではないかと思います。クイズ大会もあり、雰囲気もよく交流ができていたので楽しい時間を過ごす事ができました。今後も他大学との交流を通して、自身の視野を広げていけたらいいなと思います。（林幸奈）

これまで卒論に関しては基本的にゼミ内でしか発表したことしかなかったのですが、他大学の方の発表やコメントはとても新鮮で学びが多く、刺激になりました。似たようなトピックを扱っていても切り取り方や見

る角度によって全然違う展開になっていて、文化人類学の面白さを改めて感じられました。また、大学に入ってからにはコロナの影響でなにをするにもオンラインが主流だったので、対面での開催で他大学の方々と交流できたのは純粋に嬉しく、なにより楽しかったです。今回学んだたくさんの方のことを、自分の研究に還元していきたいと思います。とても有意義な時間でした。ありがとうございました。（本田早伽）

後藤ゼミ有志（人文学部人類文化学科）

今回私はプラネタリウム映像の生解説を行ないました。昨年12月、佐賀県の吉野ヶ里道跡で「光の響」でも同様の発表を行ないましたが、その時の経験を活かし今回の本番ではよりはっきりとわかりやすく解説をすることができました。多くの方に楽しんでいただけたようでよかったです。昨年のもも含め、ご覧になった方々がこの発表をきっかけに少しでも星空やそれに関する神話や民話、ひいては人類学自体に興味を持っていただけたら嬉しいです。（小池紗都）

佐賀県の吉野ヶ里道跡の「光の響」に続き、今回もたくさんのお客様にお越しいただいたことを大変嬉しく思いました。緊張の中で噛まないよう完璧に読み上げるのは意外と大変でしたが、「読み上げる」ことよりも「伝える」ことは常に意識していました。楽しいときは明るく、しみりした話の時は少ストーンを落として、少しだけゆっくり読むように…と工夫すればするほど、お客様がゆったりとした雰囲気を楽しんでいただけているのがわかり、一層気合いが入りました。「楽しかった」という声が聞こえてきたときはほっとすると同時に、「次はより上手く解説したい」と思いました。（奥山映）

在日インドフィールドワーク

私は在日インド人調査に関する展示の説明と、サ

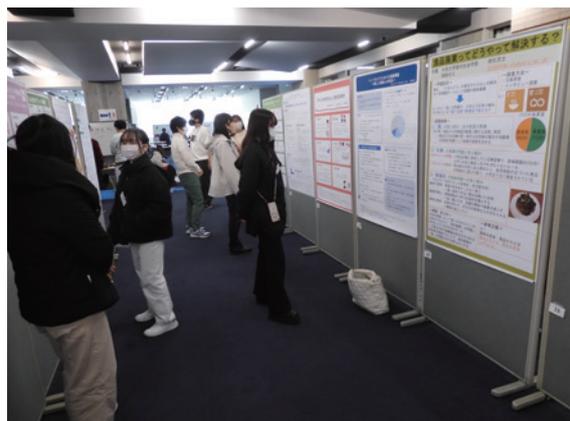
リーの着付けの案内を行った。来客者の中には、私たちと同じくインドの調査を行ったことがある方や、別のフィールドで調査を行った方もおり、お互いに情報提供ができてとても勉強になった。例えば、同じインド人でもフィジーに住むインド人に詳しい方が展示を見に来てくださり、視野を広げることができた。また、サリーの着付けはインド人のシャイニーさんという方が協力してくださり、私もとてもきれいにサリーを着つけていただいた。一枚の布で美しい服ができることに感心するとともに、サリーを着ることの大変さも感じることができ、とても貴重な経験ができた。人類学フェスでは、はじめは自分が調査した内容を発表するだけだと考えていたが、結果的に自分も来客者から多くのことを学んだと感じる。(村田陽菜)

今回の人類フェスでは2022年の夏休み中に私たちが調べてきた在日インド人の生活、宗教、教育やインドの情報をどう報告すれば良いかと悩みましたが、教授の提案やメンバーと話し合いでポスター展示だけでなく、体験型のクイズや民族衣装の試着を開催することで参加者に楽しみながら調査内容を学んでもらいました。自分たち企画以外にも、先輩方の発表展示や他のフィールドワーク班の展示を閲覧、先輩研究発表に参加することができ、単純に知識が深まっただけでなく来年から始まるゼミでの学びのモチベーションアップになりました。とても貴重な体験ができた実感しています。(大岩愁汰)

金沢フィールドワーク

私たち2022年度フィールドワーク(文化人類学)II受講生は「金沢の人ともの」をテーマに石川県でフィールドワークを行いました。展示内容は主に受講生が各自で決めたテーマに沿った調査報告(ポスター)でした。また、実際にフィールドワークの様子を体験してもらおうと考え、フィールドワーク中に起こった出来事をまとめたフィールドワークすごろくや魚のペーパークラフトなども用意しました。展示や体験を

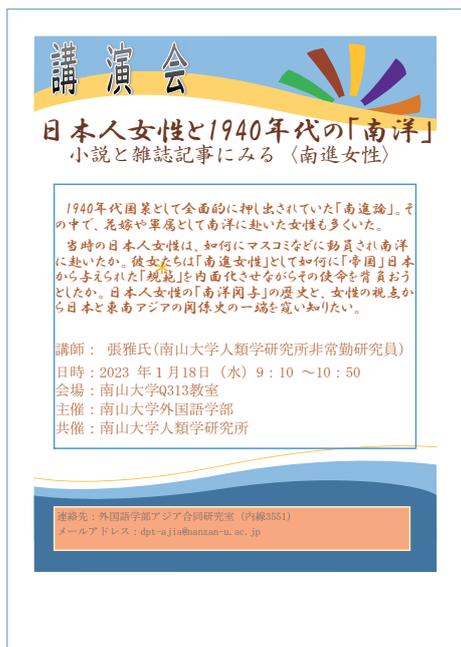
通して金沢の風土や文化などを多くの人に知ってもらうことが出来たと思います。(木原拓人)



共催企画

共催講演会

「日本人女性と1940年代の「南洋」-小説と雑誌記事にみる〈南進女性〉」



日時 2023年1月18日(水) 9:10 ~ 10:50

会場 南山大学 Q 棟313教室

主催 南山大学外国語学部アジア学科

共催 南山大学人類学研究所

講師 張雅(人類学研究所・非常勤研究員)

司会 張玉玲(南山大学・教授)

2023年1月18日公開講演会「日本人女性と1940年代の「南洋」-小説と雑誌記事に見る〈南進女性〉」が外国語学部主催、人類学研究所共催の形でQ313教室にて開催された。人類学研究所非常勤研究員張雅氏に講師を務めていただいた。南山大学外国語学部の学生を中心に全学から学生・教員が合わせて25名参加した。

講演では、1940年代日本が国策として「南進」を推し進める歴史的背景や新聞などによる「南進女性」の募集、女性作家によって描かれていた「南進女性」像および座談会における「南進女性」との会談に見られる表象の権力構造など、1940年代

の日本人女性と「南洋」とかかわっていったプロセス、「帝国日本」が拡張されていった中で作り上げられた「理想的な日本人女性」について詳細な資料を用いながらお話をいただいた。

講演後参加者から多くの質問とコメントが寄せられ、それらについての質疑応答も行われた。

(張玉玲)

共同研究

2022年度から新たに2つの共同研究が始まった。プロジェクト研究員を中心とした「デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方－記録・身体・モノ－」と、第一種研究所員による「装いの境界領域に関する人類学的研究」である。

人類学研究所共同研究

「デジタル化が生み出す新たな生／知のあり方－
記録・身体・モノ－」(2022～2024年度)

【代表】加藤 英明・菅沼 文乃・高村 美也子

(以上、人類学研究所)

【とりまとめ】石原美奈子(人類学研究所・第二種研究所員)

近年のデジタル化への社会的関心の高まりを受け、人文社会全体において、理工学の分野での技術開発やシンギュラリティの思想などの技術決定論からではとらえられない、新たな人間や社会のありかたを追求する動きが活発になっている。考古学分野ではデジタル写真やVR・AR技術といった情報技術を活用し資料を収集・分析するデジタル考古学に注目が集まっており、文化人類学においても、たとえば2012年にはDigital Anthropology (ダニエル・ミラーとヘザー・ホースト編)が出版され、その第2版となるDigital Anthropology, 2nd (ハイディ・ガイスマーとハンナ・ノックス編)が、新たに5つのサブ領域を加えて2021年に刊行されるなど、デジタル化がもたらす新たな人間や社会のあり方への学際的な関心の高さがうかがえる。

このような背景を受け、本共同研究は、2022年度から2024年度までの3年間にわたりデジタル化という事象を文化人類学・考古学の視点から検討することを目標として設定した。この目的は、全世界を巻き込んで広がるデジタル化の動向に対して、文化人類学と考古学が着目している記録のあり方、身体の動態研究・物質文化論を基としたモノ研究の3つの焦点から議論を深め、デジタル化という現象、それがもたらす諸問題、そしてデジタル化が生み出す新

たな生と知のあり方を考えることである。

第一に、デジタル技術によって、モノや言語、身体、空間などが情報としてどのように記録されるのか、その過程に焦点をあて、いかに記録をめぐる人が関わり、その実践が変化しているのかを明らかにする。現在、全世界規模で急速に広がるデジタル化の波の中で人々の生活は新たな局面を迎えている。このことについて、デジタル情報の記録・発信・活用と分析という行為が人々の生活や研究のあり方にどのような影響を与えているのかを考察する。

第二に、デジタル化にともなう、身体感覚や技法の変化に注目する。デジタル機器の普及が目覚ましい昨今、スマートフォンやパソコンに向き合う時間が増えたのは、何も先進国に限ったことではない。コロナ禍の影響下でますますデジタル機器への依存が高まるなかで、暮らしにおける身体的活動にどのような変化が起きているのかについて考察する。

第三に、デジタル化とモノとの関係を考える。デジタル機器・サービスは現在進行形で急速に社会に浸透していくとはいえ、私たちの世界は非物質的な情報のみに覆われるわけではなく、むしろ多種多様なモノとの関係のなかでこそデジタル化は成り立っている。本共同研究では、モノと人の関係にデジタル化が引き起こす変化についても議論する。

以上の目的意識に従い、本共同研究がこれまでに実施した関連研究会は以下の通りである。2022年度には3回の研究会、およびDigital Anthropology, 2nd (2021)を課題図書に設定した読書会を3回実施した。第1回の研究会では、近年のデジタル研究の動向を紹介するとともに、参加者それぞれの研究関心を共有し、研究会の方向性のすり合わせを実施した。第2回と第3回の研究会

では、インカ帝国の記録文書をめぐる方法論、エチオピアにおける郷土史・地方史の記録化、沖縄の三線の普及におけるデジタルサービスの模索や宇宙航空の観光化がもたらす身体感覚など、参加者のフィールドを事例として、デジタル化と記録・身体・モノに関する報告がなされた。それと同時に、キーワードとなる「デジタル化」「デジタル社会」、あるいはデジタルと対比的に使用される「アナログ」という言葉の定義の明確化という課題が浮き彫りになった。この点については第3回研究会で吉田研究所員より、定義に関する示唆的で詳細な説明があったが、より研究員のなかで議論し共有する必要がある。また読書会では、Digital Anthropology, 2nd (2021) のイントロダクションと、参加者の研究テーマに近い章をレジュメ形式で発表した。研究会と並行して実施することで、デジタル化に関する継続的な議論ができるよう進めた。

これらの本年度の取り組みを経て、2023年度も引き続き3回の研究会を予定しており、記録、モノ、身体をテーマにデジタル化に伴う人びとの生や知のあり方を考察していく。

第1回研究会

日時	2022年7月3日(月) 15:00 ~ 17:00
趣旨説明	石原美奈子(南山大学)
発表①	加藤英明(南山大学)「デジタル人類学に関する研究動向」
発表②	菅沼文乃(南山大学)「デジタル技術と生活との関連に関する研究動向：とくにデジタル活用の実態に関する日本社会を対象とした研究動向」
発表③	高村美也子(南山大学)「無文字言語のデジタル化は可能か：SNSの役割」
アイデア発表	全員
今後の運営について	全員

第2回研究会

日時	2022年10月22日(土) 10:00 ~ 12:00
発表①	渡部森哉(南山大学)「インカ研究に関する記録文書について」
発表②	石原美奈子(南山大学)「地方史の再構築に向けて—エチオピア・オロミア州ジンマ県／市での取り組みとその社会的意義—」

第1回読書会

日時	2022年10月8日(土) 13:00 ~ 17:00 (Zoom)
課題図書	Geismar, Haidy & Hannah Knox (eds.) 2021 Digital Anthropology, 2nd. London: Routledge.
発表者	加藤英明(南山大学) 第2章 Six principles for a digital anthropology 高村美也子(南山大学) 第1章 Introduction 2.0 石原美奈子(南山大学) 第5章 The anthropology of social media

第2回読書会

日時	2022年12月10日(土) 13:00 ~ 17:00 (Zoom)
課題図書	Geismar, Haidy & Hannah Knox (eds.) 2021 Digital Anthropology, 2nd. London: Routledge.
発表者	高村美也子(南山大学) 第4章 The anthropology of mobile phones 石原美奈子(南山大学) 第9章 Digital politics 加藤英明(南山大学) 第10章 Traversing the infrastructures of digital life

第3回研究会

日時	2023年3月18日(土) 15:00 ~ 17:00
会場	Zoom
発表①	吉田竹也(南山大学)「デジタル社会の反フロンティア—宇宙観光を事例に現代観光を考察する—」
発表②	吉田佳世(追手門学院大学)「沖縄に寄り添う楽器—三線の県外普及におけるデジタル化とアナログ化—」

第3回読書会

日時	2023年3月25日(土) 13:00 ~ 17:00
課題図書	Geismar, Haidy & Hannah Knox (eds.) 2021 Digital Anthropology, 2nd. London: Routledge.
発表者	野澤暁子(南山大学) 第7章 Disability in the digital age 菅沼文乃(南山大学) 第15章 The role of the digital anthropologist in citizen science and public participation mapping projects

人類学研究所共同研究

「装いの境界領域に関する人類学的研究」

(2022 ~ 2024年度)

【代表】 宮脇 千絵(人類学研究所)

1980年代以降の文化人類学では、ある地域や民族集団などの伝統的な装いが、グローバルに広がる生産・流通・消費の過程でいかに変容しているの

かを論じてきた。その背景には、観光資源化や文化遺産化に伴う「伝統」の商品化、また西洋ファッションを基盤とするファッション産業への取り込みなどの影響が挙げられる。国境を越えて展開される装いをめぐるこのような動きは、国家や民族、信仰、伝統、ジェンダーなどによって規定されてきた装いの境界を揺るがし、再構築させている。一方で先行研究では、ローカルとグローバル、非西洋と西洋、伝統と近代といった単純な二項対立の構造が再生産されることも指摘されてきた。

この問題を乗り越えるには、複雑に入り組む装いの状況を明らかにする必要があると考える。素材、デザイン、衣装形態といった物質的側面と、その付与される意味や役割といった象徴的な側面が、決して一律に変化するわけではないこと、そしてそれらが絡み合いながら変化するプロセスを詳細に検討する必要性である。研究会では、この問いを明らかにするために、特に中国・台湾の伝統的衣装に着目する。

中国・台湾では2000年代以降、急激に進む都市化や、観光資源化や文化遺産化に伴い、各民族の伝統的衣装が文化資源として再評価されており、民族集団の境界線と装いの差異を一致させることが迫られている。しかし一方で、民族歌舞団のパフォーマンス、民族ファッションショー、観光地やSNSといった文脈で披露・共有される衣装は、一見特定の民族集団と結びついているようで、その差異が不明瞭であることが少なくない。つまり素材や技法、デザインが大幅に改変され、視覚的に担保されるエスニック性が曖昧になっているのである。本研究会ではこの曖昧さを装いの境界領域ととらえ、その内実を明らかにするのが本研究会の目的である。

2022年度は研究会を3回実施した。第1回目(2022年8月1日)はオンライン(Zoom)で実施し、宮脇が趣旨説明をおこない、研究会メンバーで今後の予定を確認した。第2回目(2022年12月4日)はハイブリッドで実施した。宮脇は「中国のエスニック・ファッションショー『絲路雲裳』を事例に」と題し、世界各地で開催されている民族衣装や伝統的衣

装に関するファッションショーをエスニック・ファッションショーと捉え、中国雲南省で近年開催されている少数民族のファッションショーの事例を紹介した。謝は『多彩中国』という中国少数民族のファッションイベントの映像紹介をおこなった。第3回目(2023年3月20日)は対面で実施した。田本は「『～のようなもの sort of something』としての民族衣装」と題し、台湾の「民族衣装」をめぐる境界の曖昧さがその生産や流通において生じていることについて論じた。謝は「装いの揺らぎと再構築—民族集団の『境界』の表し方—」と題し、民族集団と装いの関係の揺らぎをさまざまな事例から紹介した。

共同研究の1年目を終えて浮かび上がってきたのは、中国・台湾における装いと特定の民族集団の境界線を一致させようとするさまざまな力と、それが明確になるとは限らない曖昧な領域の存在が多様な場面でみられることであった。とりわけ、ファッション産業や観光業との関わりにおいて商品化される際に帰属が曖昧なものが顕著にみられる。今後も引き続き議論を重ねていく予定である。

第1回研究会

日時	2022年8月1日(月) 13:30 ~ 15:40
発表	宮脇千絵(南山大学)「装いの境界領域に関する人類学的研究(趣旨説明)」
研究紹介	謝黎(聖心女子大学) 佐藤若菜(京都女子大学) 田本はる菜(成城大学)
総合討論	全員

第2回研究会

日時	2022年12月4日(日) 13:00 ~ 16:00 (ハイブリッド)
場所	人類研所長室、Zoom (ハイブリッド)
発表	宮脇千絵(南山大学)「中国のエスニック・ファッションショー『絲路雲裳』を事例に」 謝黎(聖心女子大学)「『多彩中国』の映像紹介」
総合討論	全員

第3回研究会

日時	2023年3月20日(月) 13:30 ~ 17:00
場所	人類研所長室
発表	田本はる菜(成城大学)「『～のようなもの sort of something』としての民族衣装」 謝黎(聖心女子大学)「装いの揺らぎと再構築—民族集団の『境界』の表し方—」
総合討論	全員

研究業績

第一種研究所員

DORMAN, Benjamin

寄稿

Editors' Note, *Asian Ethnology* 81 (1&2) :1-2.
「オーストラリアにおける制限、ロックダウン、そしてフィールドワークの変化」『人類学研究所通信』22:14-15。

その他

Asian Ethnology Podcast
Interview with Susanne Klien: Urban Migrants In Rural Japan.
Interview with John Powers: Tibet's Rivers, Climate Change, and Environmental History.

宮脇千絵

論文

「1986年収集の中国雲南省少数民族衣装資料—タイ族、ハニ族、ペー族のみやげもの—」『南山大学人類学博物館紀要』41:21-37。

共著

「衣の多様性と変化：民族衣装はグローバル化する世界でなぜなくなるならないのだろうか」『フィールドから地球を学ぶ：地理授業のための60のエピソード』横山智、湖中真哉、由井義通、綾部真雄、森本泉、三尾裕子(編)、pp.10-11、古今書院。

編著

「はじめに」『人類学研究所研究論集(人類学・考古学における「大きな理論」と「現場の理論」)』宮脇千絵、藤川美代子(編) 12:1-3。

その他

「(特集 メイド・イン・ジャパンのものづくり) 序 メイド・イン・ジャパンのものづくりを考える」『国際ファッション専門職大学紀要 FAB』4:229-233。
宮脇千絵・白水高広・高馬京子・蘆田裕史・池上慶行・金谷美和・田中雅一「(特集 メイド・イン・ジャパンのものづくり) コメントへの応答とディスカッション」『国際ファッション専門職大学紀要 FAB』4: 263-272。

研究会・シンポジウム報告

「人類学とファッションスタディーズ—中国のエスニック・ファッションショーを事例に—」京都人類学研究会6月例会、京都大学(オンライン)、2022年6月24日。

「装いの境界領域に関する人類学的研究(趣旨説明)」南山大学人類学研究所共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」、南山大学、2022年8月1日。

「中国のエスニック・ファッションショー—『絲路雲裳』を事例に—」南山大学人類学研究所共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」、南山大学、2022年12月4日。

講演

「文化人類学とファッションスタディーズ」、『クリティカル・ワード ファッションスタディーズ—私と社会と衣服の関係』出版記念オンライントーク、オンライン、2022年4月10日。

博士研究員

中川朋美

論文

吉田真優、中川朋美、中尾央「朝日遺跡Ⅲ11A13区出土人骨の再検討」『あいち朝日遺跡ミュー

ジウム研究紀要』2:47-61。

中尾央, 田村光平, 中川朋美「人間進化における
集団間紛争:偏狭な利他性モデルを中心に」『心理
学評論』65 (2) :119-134。

Hisashi Nakao, Tomomi Nakagawa, Mayu
Yoshida. 3D data of human skeletal
remains acquired by two kinds of laser
scanners: Einscan Pro HD and Creaform
HandySCAN BLACK™ | Elite. Journal of
the Nanzan Academic Society Humanities
and Natural Sciences 24: 309-314.

Akihiro Kaneda, Tomomi Nakagawa, Koji
Noshita, Kohei Tamura, Hisashi Nakao.
A proposal of anew automated method
for SfM/MVS 3D reconstruction through
comparisons of 3D data by SfM/MVS and
handheld laser scanners. PLOS ONE 17 (7):
e0270660. (<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0270660>).

中川朋美, 吉田真優, 中尾央「岡山県(と広島・兵
庫県) 出土古墳時代古人骨の幾何学的形態測
定による分析」『古代吉備』33:43-60。

研究会・シンポジウム報告

「上黒岩遺跡出土の人骨の外傷に関する微視的研
究」、新学術領域研究「出ユーラシアの統合的
人類史学」第8回全体会議、慶応大学(オンライ
ン)、2023年1月8日。

中尾央, 中川朋美, 田村光平, 金田明大, 吉田真
優, 野下浩司「古墳時代古人骨頭蓋形状の幾
何学的形態測定による分析」、HBES-J 2022、
2022年12月10日。

「考古学からみた暴力の拡大と連動」、南山大学(オ
ンライン)、企画「若手からみた考古学」、2022
年8月7日。

A microscopic study on trauma of human
skeletal remains from the Kamikuroiwa
site. APPPF, Doshisha University (online),
July 31th, 2022.

The Cause of Warfare in The Middle Yayoi
Period of The Japanese Archipelago, WAC-

9, Cubex Centrum (Prague), July 4th,
2022.

Hisashi Nakao, Tomomi Nakagawa, Kohei
Tamura, Yuji Yamaguchi, Naoko
Matsumoto, Takehiko Matsugi, Collective
violence and social hierarchy in northern
Kyushu in the Yayoi period, WAC-9, Cubex
Centrum (Prague), July 7th, 2022.

中川朋美, 吉田真優, 中尾央「中国地方における
古墳時代人骨の 幾何学的形態測定による分
析」、考古学研究会第68回研究集会(オンライ
ン)、2022年4月23日。

その他

「弥生時代の「暴力」の研究」『考古学ジャーナ
ル 12月号』No.776:35-39。

科学技術・学術政策研究所「ナイスステップな研究
者2022」受賞、2022年12月。

プロジェクト研究員

高村美也子

著書

『プランテーションの人類学:タンザニア・ボンデイ社
会とココヤシ栽培』風響社。

論文

“Double Religious Structures in Bondei
Society, Swahili”,Faits et phénomènes
culturo-religieux au Sahel. Cultural religious
facts and phenomena in the Sahel, pp.127-
142, Les Editions Monange.

「スワヒリ (Swahili) 形成過程と現在のスワヒリ」『人
類学研究所研究論集(人類学・考古学における
「大きな理論」と「現場の理論」』宮脇千絵、
藤川美代子(編) 12:127-139。

学会発表

「ボンデイ語のことわざ『矢が落ちた草原が矢の場
所である』は何を表現しているのか」、ことわざ
学会 杏林大学井之頭キャンパス(オンライン)、

2022年12月3日。

講演

「カリブニ スワヒリ世界へ」『大人のための文化人類学講座』第4回野外民族博物館リトルワールド 2階多目的ホール、2022年11月13日。

竹内愛

著書

『ジェンダーと災害の民族誌：変容する農民カーストとネワール社会』風響社、全290頁、(ISBN: 9784894893351)。

学会発表

「複合的災害下におけるパタンに居住するネワール民族の女性自助組織の果たす役割ー 2015年ネパール大地震と新型コロナウイルスパンデミック以後のコミュニティ復興の事例からー」国際開発学会第33回全国大会、2022年12月3日。

「ネパール・旧王都パタンの女性自助組織のネットワークによるコミュニティの災害レジリエンス向上に関する一考察」日本女性学会2022年大会、2022年6月19日。

その他

「複合的災害下におけるパタンに居住するネワール民族の女性自助組織の果たす役割ー 2015年ネパール大地震と新型コロナウイルスパンデミック以後のコミュニティ復興の事例から」『国際開発学会第33回全国大会予稿集』 pp.72～75、平和構築、レジリエンス session【21A03-05-02】。

菅沼文乃

論文

「社会にあらわれる古い、人々に生きられる古い——人類学における老いの対象化について」『人類学研究所研究論集 人類学・考古学における「大きな理論」と「現場の理論」』宮脇千絵、藤川美代子(編) 12:46-56。

学会発表

「沖縄都市部で地域祭祀はいかに継続されるのか：那覇市一地域の事例報告から」沖縄文化協会2022年度公開研究発表会、オンライン、2022年6月26日。

研究会・シンポジウム報告

「沖縄都市部で「老後」をいかに生きるか?——現代日本社会における老いの人類学的研究」第7回まるはち人類学研究会「特別企画：北陸先端科学技術大学院大学(JAIST)の大学院生・若手研究者との交流セミナー」、北陸先端科学技術大学院大学(JAIST) 金沢駅前オフィス、2023年3月4日。

加藤英明

学会発表

「裾野で生きる町工場——設備導入をめぐる人びとの聞き取りをとおして」日本オーラル・ヒストリー学会第20回大会、立教大学、2022年9月10日。

研究会・シンポジウム報告

「『単品モノ』が生み出す共同性——異なる技法をもつ自動車産業の町工場の人びとの事例から」、第7回 まるはち人類学研究会(「特別企画：北陸先端科学技術大学院大学(JAIST)の大学院生・若手研究者との交流セミナー」)、北陸先端科学技術大学院大学、2023年3月4日。

科学研究費助成事業(2022年度採択課題)

氏名	採択課題		
石原美奈子	基盤研究(B)	エチオピアにおける郷土史・地方史の体系的収集・分析を通じた多元的歴史認識の解明	継続
渡部森哉	基盤研究(B)	南米アンデスの初期帝国ワリの成立と地方支配に関する研究	継続
川浦佐知子	基盤研究(C)	合衆国西部の水利権係争に働く部族主権の検討:モンタナ州水利権合意に焦点をあてて	継続
後藤明	基盤研究(C)	人類学が我が町にやってくる!: デジタル・アンソロポリウムの構築	継続
吉田竹也	基盤研究(C)	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通じた観光リスク論の探究	継続
中尾央	基盤研究(C)	戦争と道徳性の進化に関する自然哲学的考察	継続
ANTONY Susairaj	基盤研究(C)	新興中間層の台頭とインド映画の新局面:新ジャンルの成立と映画産業の変貌を焦点に	継続
張玉玲	基盤研究(C)	福建省福清出身華人の移住および同郷紐帯の拡大と文化的・社会的制度としての「故郷」	継続
藤川美代子	若手研究(B)	船上生活者の教育と福祉に関する文化人類学的研究:日本・中国の都市部と村落部の比較	継続
藤川美代子	若手研究	海洋生物の捕獲と養殖をめぐる文化人類学的研究:中国・台湾・フィリピンの事例から	継続
宮脇千絵	若手研究	現代中国における少数民族女性の稼得労働とエスニシティに関する人類学的研究	継続
竹内愛	若手研究	ネパールにおける女性の集合的エンパワメントの比較研究 - 州レベルにおける多様性	新規
中尾央	新学術領域研究(研究領域提案型)	三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進	継続
中川朋美	研究活動 スタート支援	弥生時代における暴力の社会的影響	継続
竹内愛	研究活動 スタート支援	ネパールの旧王都パタンにおける女性自助組織と災害:震災とパンデミック	継続
竹内愛	研究成果公開 促進費 (学術図書)	ジェンダーと災害の民族誌:変容する農民カーストとネットワーク社会	新規
高村美也子	研究成果公開 促進費 (学術図書)	プランテーションの人類学:タンザニア・ボンデイ社会とココヤシ栽培	新規

刊行物 【2022年度】

刊行物

- 人類学研究所(編) 『年報人類学研究』第13号(2022年6月30日発行)
- 人類学研究所(編) *Asian Ethnology*, volume 81, Number 1&2 (2022年7月18日発行)
- 人類学研究所(編) 『人類学研究所通信』第22号(2022年7月31日発行)
- Mitsuru SÔMA, Kiyotaka TANIKAWA & Akira GOTO (eds.)
『人類学研究所 研究論集(Symposium on Calendars Used in Asia and
Oceania)』第11号(2022年5月31日発行)
- 宮脇千絵・藤川美代子(編) 『人類学研究所 研究論集(人類学・考古学における「大きな理論」と「現
場の理論」)』第12号(2023年3月15日発行)
- 後藤明(著) 『環太平洋の原初舟—出ユーラシア人類史学への序章(南山大学人類学研
究所モノグラフ・シリーズ1)』第1号(2023年3月20日発行)

人類学 研究所 スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授
第一種研究員	DORMAN, Benjamin 宮脇千絵	外国語学部英米学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授
第二種研究員	ANTONY, Susairaj 石原美奈子 川浦佐知子 CROKER, Robert 後藤明 張玉玲 中尾央 藤川美代子 MUNSI, Roger Vanzila 吉田竹也 RIESSLAND, Andreas	人文学部人類文化学科・講師 人文学部人類文化学科・教授 人文学部心理人間学科・教授 総合政策学部総合政策学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部アジア学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授 人文学部人類文化学科・准教授 国際教養学部国際教養学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部ドイツ学科・准教授
博士研究員	中川朋美	博士研究員
研究員	高村美也子 竹内愛 菅沼文乃 加藤英明	プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員

非常勤 研究員 【2022年度】

氏名	研究課題
張雅	国際化推進事業(第5期)「なりわいと移動の人類学:中華圏の研究者との協同から」担当研究員
謝黎	共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」共同研究員
佐藤若菜 (新潟国際情報大学・准教授)	共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」共同研究員
田本はる菜	共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」共同研究員
中尾世治 (京都大学大学院・助教)	「インフォーマント」からみたアフリカ史研究史:ヴォルタ川流域のイスラムの歴史についての知識とその流通について
山崎剛	人類学の使い方についての研究
小坂恵敬	パプアニューギニアの伝統的通過に対する歴代国家システムの対応
野澤暁子 (名古屋大学・共同研究員)	中世ジャワ・ヒンドゥー文化のテキストと実践に関する音楽人類学的研究
梅津綾子	多様な家族、性、信仰のあり方—アフリカ、ムスリム・ハウサの「里親養育」慣行、および日本のLGBTムスリムを事例に
辻輝之 (広島大学・准教授)	多宗教共存とエスニシティ共生—旧英領カリブ社会における民族紛争抑制のメカニズム
Patrick McCartney (Adjunct Lecturer, Kyoto University)	Street Performers across the Ancient World: Wrestling, Tumbling and Pole Dancing
Paul Capobianco (Lecturer, Lingnan University)	Diversity and Intercultural Communication in Contemporary Japan
岡本圭史 PECKITT, Michael Gillan	アフリカ都市の宗教人類学—ケニア、ドゥルマ社会における悪魔言説と生活実践 Loving the Robot with Disabilities: Japan, Robotics and the Representation of the Needs of People with Disabilities
佐藤吉文	先スペイン期アンデスにおける頭髪とは何か:非二次元ジェンダーの考古学的研究に向けて
廣田緑 (国際ファッション専門職大学・准教授)	インドネシアのcollective(美術家集団)にみる現代美術の社会的役割
PETERSEN, Esben (Ritsumeikan University)	"The happiest land of them all": Uchimarū Kanzo and the beginning of a fairy tale story about Denmark

人	類	学
研	究	所
通	信	第23号

2022

2023年7月31日刊行

南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

編集責任者: 宮脇千絵

編集委員: 渡部森哉、ドーマン・ベンジャミン、藤川美代子

編集事務局: 古澤夏子

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

TEL: 052-832-3111(代表)

Website: <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/>



人類学研究所

デザイン: 株式会社サウンドデザイン